(題字松陰先生筆蹟擴大撮影)

大正十四年十二月發行

放會難認

山口縣立萩中學校校友會

幸蟲が匍行す、一寸頭に觸はると直ぐ方向變換をする、又突くと復かはす、一体ごこを目當に行くのか。朝、眼が醒める、食卓が出てるから膳に据はる、制服を着て出る、一体何の類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向變換をする芋蟲の様な真似しかの類性に方向。一岩田博藏

次目號四拾貳第 誌雜會友校發舉中報

ぐ力力養め力致則久力致活則久養永め力夕月墓凉 拜夜夕省ぶ夕夏行夏日設森氣説 久なる。 でし

井波吉宮柳小神脇中仙中伊山黑濱金秋河香藤峯田河金辻水溝三田本大桂漆渡五岩田 上多賀崎井原代本村波 ^{原藤}軽磯村森山村川 井 岡北村田永野田浦村村村 本邊島武中 野 一三敬美英 吉太定治 幸 祥保 良 忠廷勝一春彦英好武 [良直照茂 親公夫郎三紀雄元明武秋郎芳夫伸一是三政端女亨雄佑明郎雄八治男一典實介人彥一

		- M	
○會誌○上級學校在學者調○計報 一會誌○上級學校在學者調○計報	○卒業式○生徒受賞者○	漢 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	東陸東宗龍島高工より 選信官吏練習所より 大 大 よりりょり ある ひょりり かん こうり かん こう かん こうり かん こう いん こう こう いん こう こう いん こう いん こう こう いん こう いん こう こう いん こう こう いん こう こう いん こう こう いん
→ 山口競技大會○武 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	同特別 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所	同同同同同同 同 同 阿 校校校校校校 所 校 校 松寰紀古波谷久岩多小久横 本田藤本 ^多 川田田野保山田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田
hat .	一一元	通	武一克超義 稔貞養道 秀 夫雄三然貫清人夫男治穣雄

鎖裁夏水忠電教朝忠 の都さしての がさしての 教 養権 で 本 き で の の な き で の な る な る な る な る る る る る る る る る る る る	學 び の 関
屋好橋丸井久徐田崎 安滁秋兵。正光芳正	夫彥滋治市直人人夫英雄 次 輔一夫新茂
松浦東大名豪山エール名豪山口高高 京阪 日本高高高より 高高高より 一高高高より 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点 一点	で 中 中 和 の が が が が が が が が が が が が が
同同同同同同同同同 校校校校校校校 X田吉森大三河吉 原屋田谷島部田 節 正文悌 生夫壽誠信市甫寬	横 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本

洋服を着るの理由如何、便利なるが故也、其 算者曰く、和魂洋才ご、宜なる哉。吾人の風 質者曰く、和魂洋才ご、宜なる哉。吾人の風 俗、習慣、乃至趣味、思潮、近時著しく洋化 俗、習慣、乃至趣味、思潮、近時著しく洋化 るさせば幸也。言ふ迄もなく便利なるが故也、其 まる矣。—岩田博 譲



学びの園

學校教練の振作に就て

特別會員 前 原

進といふことも、此の點に介在するのである。 **暴面に於て各國競で軍備を擴張しつゝありと言ふも過言でないのである。教練の目的たる國防能力の增** りて、國防は軍人の專賣特許でなく、國民の國防である。歐洲大戰後裏面に平和を呼び、軍備を縮小し、 く、我が國は國民皆兵を以て建國の本義として居るのみならず、近代戰の特色は、國家總動員といふにあ は、忠良なる國民として、當然心得置くべき信念の下に行はねばならぬと思ふのである。諸子の知る如 一部を學校に移したさいふ意味合のものでは毫もないのである。即ち此の程度の軍事智識や軍隊的動作併せて國防能力を增進するさいふのであつて、學校教練は單なる軍事教練でなく、換言すれば軍隊教育の 教練の目的は學生生徒の心身を鍛錬し、團體的觀念を涵養し、國民の中堅たるべき者の資質を向上し、

n 歐洲各國の學校、其他一般國民に對する軍事豫備教育は徹底的のもので、各種の方法に依て盛に行は 紹介することとしよう。日本の某教授が、米國の某大學參觀の為め、自動車を騙った所が、役門に 政府は巨額の豫算を投し、所謂裏面の軍備の充實に吸々として居るのである。此等の詳細に就ては、

出かけるといふ位で、日本と比較して其一般を窺知することが出來ると思ふ。斯る一般情勢に於て、今 人が一度外國に渡つて、日章旗の難有さを殊更感じたり、又日本文化の未だ外國に及ばない點を痛切に 論に外ならないのであると思ふ。勿論此の責任が教育者其人にあることはいふ迄もないことである。吾 感じたりするのど同様、日本國民は由來勝つことを知つて、敗くることを知らないものが多いであらう ご思ふ。即ち連戰連勝は、大に國民性をして己惚心を增長せしめたとも言へる。時勢の歸趨は斯かる迷 夢を破らねばならぬ。吾人の堅質なる覺悟と、正當なる理解を要するや切なのである。 の各大商會、即ち日本で三越とか白木屋とかいふやうな商店員は、一年に必ず一、二回は野營に 校を軍隊化するどか、平和を紊るものであるとかいふのは、反對せんが爲めの一部者の議 ↑軍服姿の學生の教練實施中を見て、是は兵營と間違へたと狼敗したといふ滑稽話もある。

該訓練を行ひ、一般青少年にも近く實施せられんでするのである。抑も學校の兵式教練は、明治十九年 文部大臣森有禮氏により創始せられたので、森文相の兵式教練に關する抱負は、相當徹底的で且積極的 である。 のものであつて、東京の高等師範學校に於ては、當時士官學校を卒業せられた松石安治少尉(後に中將 大正二年の改正で、体操科と稱するものが出來、其一分科たる教練が、即ち從來の兵式体操と稱したの を擔任せられた最初の方である。當時は普通体操に對して、之を兵式体操と呼んで居つたさりであるが、 に進まれ、不幸病の為めに放人さなられた人)を教官として聘用し、之が現役將校にして學校體操の一部 此の秋に當り、 此の兵式体操を學校に課して以來、學生生徒の体育の增進、精神教育に稗補した功績は相當で 青少年の中、先づ國氏の中堅たるべき使命を負うてゐる中等學校以上の學生生徒に、

校長の命を守り、各教職員の指導並に援助と、諸子の奮鬪努力により、至誠以て重任に酬いんとするも つて學校教練の振作さいふことになつて居るのである。吾人は此の重大なる職責を果す上に於て、克く 次會商の後、茲に成立して、本年度より實施することになったので、原々今に始まったことでなく、 を進め、漸く成案を得て、文政審議會の議に附せられた所、滿場一致の賛成决議を得、陸軍文部兩省數 の情勢に顧み、又前述べた通。大戰後歐米諸國の現况に鑑み、爾來當局に於ては、着々此が方策に研究 六年十月、臨時教育會議から內閣總理大臣に宛て、學校教練振作に關する建議案が出たさうである。右 のである。 あつた様に聞くが、社會民心が稍緊張を缺くに及んで、學校の教練も次第に其弊を承けた關係か、大正

天樹公萩開府事情

特別會員 香川 政

今春開府三百年記念に際し、諸君に講演したる要項なり

一総叙

江晋人より二十七代、毛利元就の孫、隆元の嫡男なり。今回萩に於て三百年祭を行はるゝに當り、正二 天樹公名は輝元、 幼名幸鶴丸、髪を削りて、宗瑞といひ、又幼菴と稱す、天穂日命より五十四代、大

四十二歳征韓役に出陣し、四十四歳權中納言清華五大老に列す。 臣秀吉と高松に對陣し、三十七歲秀吉の島津征伐に從軍し、三十八歲參議に任じ、四十一歲廣島に城き、 天文二十二年正月二十二日藝州吉田に生る。年十一父を喪ひ、十九歳祖父を喪ふ。三十二歳にして豐

若關原役の際に生れ合はせたらば、君は何れに屬するかと問ひて、先づ其志を見たりといふ。 關原役は種々の點に於て毀譽褒貶の定まらざるものあり。熊本の儒荻昌國は新に來り學ぶ者ある毎に

大君といる。同じく大阪の儒藤澤南岳の著には、大阪の儒中井積善は其著、逸史に於て、大阪に對しては豊孺子、淀臺、石賊といひ、家康に對しては

景勝舉,家康背盟十罪,。家康猶綏撫。

徳富蘇峯の近世國民史に日、「「「「「「」」」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「」」、「「」」、「「」」、「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」」、「「」

徳富蘇峯の近世國民史に曰、

西軍の敗北は、秀秋の裏切なきも既にその運命であつた。主將なく統一なく、熱心なる闘志なく、家 康の名に氣死した。

谷等の三萬三千內外に過ぎず。 安國寺の兵は、戰はずして走り、総勢八萬といふも殊死して戰ひしは石田、島津、小西、宇喜多、大 小早川の一萬三千と、 脇坂等四將の五千は裏切り、毛利秀元の一萬六千は動かず、長曾我部、長束、

要するに負けても手柄なりと、蘇峰は三成に對して賞賛せり。

である。 一萬五六千の毛利軍が、全く戰はずして退却したのは、一千五百の小兵にて勇奮の島津と一種の對照

との批評は、蘇峰ならずとも誰も言ふ所ならん。

顧

軍中心の大谷吉繼、信濃上田城主の眞田昌幸、幸村父子、並に大阪西丸の毛利輝元公等は特に其の著き ものなりきの 惟ふに西軍の諸將は、多少石田等との縁故もありしにせよ、凡て秀吉の恩顧に酬いんがためなり、西

秀吉薨ずるに當りて五大老に與へたる遺書に曰、

秀より事なりたち候やうに、此かきつけ候の 事なく候かしこ しゆとしてたのみ申候。なに事も此ほかにおもひのこす

返々秀よりたのみ申候。五人のしゆ、たのみ申候と しく候、 以上 いさい五人の物に、 申わたし候。

秀

吉

月五

3 8

5

かけかつ

秀い

詣る

輝元公も、景勝、秀家も、 この信頼に對して、大阪に同意せずには止むこと能はざり

五具相

御當家舊事記といふ毛利氏の古記錄に曰、

吉川廣家福原廣俊兩人、御座船迄も馳集り、御出船の朝迄も御諫申上候

二人は諫爭して、輝元公を引止めんとせり。

とを辯疏するの書を送りて、只管主家の利を謀らんとするに努めたり。 の前々日に、三人は家康の部下、榊原式部、本多佐渡、永井右近三人に宛て、 二人と志を同じくしたる益田元祥、熊谷元直、宍戸元次の三人あり。慶長五年七月十三日即ち關原役 輝元の主謀にあらざるこ

福原二人に書を送らしめ、毛利軍にして、若戰鬪に加はることなくんば、主家の封は安全なら 家康は之を利用して、西軍の勢を殺がんとし、翌十四日本多忠勝、井伊直政に命じて、毛利軍の吉川 んと言

と全く無關係なり) この結果として十五日の合戦に、毛利軍は戰闘に参加せざりしものなり(小早川軍の行動は、 毛利氏

戦終るや、家康は輝元公の大阪に據らんことを恐れ、本領安堵を以て、更に之を誘ひ、 吉川。

亦これに周旋せり、公の九月二十二日を以て、 家康に次の書を送り、大阪を撤退せり。

一我分國無相違被:思召,分之通、誠合:安堵,候事

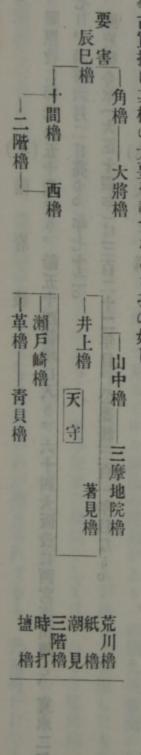
一於,此上,者、西丸之儀渡可」申候

のなり。蘇峯日、 大に驚きて、抗議せしも、頑として懸かざりき、要するに毛利氏の主從は、家康の甘言に欺かれたるも 公一たび大阪より撤退するや、家康の態度は俄に一變して、毛利氏に大削祿の命を下し、吉川・

家康は、事の九分九厘迄は、毛利氏に略はすに甘言を以てし、最後の一厘に本色を暴露して、 虐遇した。

六萩

家古實抄に其構の大要を載すること次の如し。 同年十一月十一日公入城す。但公の居僅に成りしに過ぎず。全部の落成は十三年六月なりき。 は外曲輪東西九町、南北六町、矢倉二十あり。天守高さ五十尺、 關原敗戰慶長五年九月十五日、防長受領同年十月十日にして、萩城の普請慶長九年六月一日に始り、 石垣六間、堀の廣さ二十間なり、



7

七日、陽曆六月二日薨ず。年七十二。 關原役に輝元公五十歳なり。齡五十四萩城に入り。六十四大阪役に西宮迄出陣し、寬永二年四月二十

開府後今年(大正十四年)は三百二十二年目、公薨後三百一年目なり。

八人と為り

推入誠以待入人。 というでは、 これを見て記して曰、 これをは、 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る。 これを見る これを見る。 これをしる。 これをし

臣下有、疾、親徃視、之。

二年藩籍を奉還して、萩城は遂に王政維新の率先地となる。 倫舘を開く。十代重就藩經濟及び撫育法を確立す。十六代敬親文武忠正にして公明正大を旨とす。明治 元就を初代として、四代秀就防長十八宰判制を立つ。五代綱廣萬治制法三十三條を定む。八代吉元明

再開府の心あるべし

三百年記念は過去の萩を祝ふものなり。今日の萩として祝はるべき資格は何ぞ。 江山秀麗似,仙鄉, 依、舊花園尚帶、香。往事茫々人不、見。古城秋色自荒凉。 人あり。荒凉の萩を評して日、

萩は人材を抜き去りて、夏橙を植ゑたりの

るべきか。 今の萩は寺と墓と多く、過去の史料に富む。されご是れ何ぞ祝ふべきの萩ならんや。 將來の萩は何を作

府の心あるべし。更に新しく祝ふべき萩を作らんことを要す。 鐵道の開通は將來の萩を造るものならん。されざも是れ丈にては祝ふべき資格なし。萩の人宜しく再開

笠山の橋並に仝山の特色につきて

特別會員 田 中

為め、東京から、三好博士が來萩せられ、近く保存指定さるゝことになつて居る。雜誌部長から之につ きて書けどの依賴を受けましたので、其紹介を致します。 最近私が、越ヶ濱笠山に於て採集した橋が、天然記念物とする價値があるこ云ふので、此度其調査の

栽培品なら右近の橋とて、紫宸殿の前にも可なり大きいのが植ゑられてあり、此萩町だけでも、私は五 る。由來柑橘は、南清が世界の根源であるらしく、日本在來の柑橘としては、ひどり唯此橋だけであ には、殊に色々の種類のものがある。所が之等は皆栽培品はかりで、人が他より移植したもの許りであ 抑も柑橘類は、此萩附近だけでも、集めて見ると中々澤山の種類があり、四國九州豪灣の如き、暖地 かゝる名木が、古來我領土内に天然自然に生育せしものは、九州地方の暖地にのみ限られて居た。

9

立つのは果皮が厚くて、香氣も外 自生して居たことは、誠に珍らしいことである。其果質を栽培品と比較すると、やゝ異なるが、 ので、早速に保護する必要を感じましたので、天然記念物調査委員の三好博士に其旨を通知し、一方で ても學術上大切なものであるのに、近來色々の目的で、其自生區域の樹木がしきりに切られ又燒かれる は酸味が強くてどても食へない。 念入りに鑑定されたが、やはり野生の橋である。 は枝附きの果實一個を帝大の分類學の權威である牧野先生に送り、 然るに此橋の野生のものが、古來此笠山の或區域内の雑木林中に混じて、可なり多數 私は最初に實物を見た際には橘の變種ではないかと思つた。何れにし 形も、頗るゆずに似て居る。栽培品は冬になると甘くなるが、 鑑定を乞ひました。所が牧野先生も 签 殊に目

て自生北限地即ち最も北方に自生して居ると云ふ點である。こんなに北方に自生して居るもの言して置きたいと思ふ。それは本州に於て、特に珍らしいと云ふばかりでなく、此植物の分布の言して置きたいと思ふ。それは本州に於て、特に珍らしいと云ふばかりでなく、此植物の分布の ない。笠山以北には栽培すれば育たぬことはないが、天然は之より北方には自然の生育を許さなかつた が越ケ濱の人々は以前指定された明神の池と、一ヶ所より、二つの名物を出すことであると喜んで居る。 になる。そこが天然記念物と云ふものである。多分天然記念物に指定されることゝは思ふが、かゝる名木 永年山奥で名も知られずに居たのが、此度世に出たことにつきて、私は非常に愉快に感するのである。 次に私は 序でに此山につきての、 何故に獨り我笠山の橋に限り、内務省から天然記念物として保護を加へらるゝかにつきて、一 所が此木が保護されて、殘さるれば、此天然のできごとが幾年の後までも、記念さる」ここ 著しきことを述べておく。 の上から見 他に

皆それである。其又玄武岩が、石英玄武岩と呼ぶ類の極めて少い珍らしい岩である。前地方に多い岩で、多くは臺地をなして居る。萩の沖の六島村や、福川村の羽賀臺、 い。我國の火山の多くは、安山岩である。玄武岩と呼ぶ岩は、關東には稀で、中國から九州地方殊に肥 上に噴火口を有する火山としても、山口縣下に類が少く、又其山が玄武岩でできて居ることも面白 吉部の 仙石臺なご

れます。 「球しだ」と呼ぶ暖地のしだや、「小谷渡り」と呼ぶ寒地性の「しだ」が、此山の呼物の植物であ 次に不思議なことは、此山が珍奇な植物に富んで居ることである。從來は地下に球の如き塊莖を有する 部とか、反對に樺太北海道東北地方に多くて、他では多く見られぬ植物が、此橋採集後に、數種見出さ は保護を加 所が此「しだ」は、今は可なり分布も廣くなつて居るが、それよりも分布の狭い臺灣琉球九州南 尚は探せば色々あるに相違ない。 其外本縣下又は本郡には、除り多く見られぬもの へたら、なざ、云はれたそふだが、非常に群生して居て、とても絶ゆる心配はなからうと思は かい 此迄私の採集したものだけでも、拾數

護するわけにはいかぬか、自生の狀態が見たいな、 科の「かかつがゆ」を見せたときには、こんなものがある位なら、 此度博士の來萩を幸に、此等の標本を示し、且つ此山に産する從來知られて居た色々の植物につきて しましたどころ、博士は痛く驚かれ、丸で熱帯性である。それは面白いな、それは不思議だ、 山全部を保護したきものだと希望を述べられた。 と申された程であるの尚ほかいる 橋は當然あつてよきもの 此不思議な現象につきては、 特色ある山 これを保 色々の 殊に桑

スカ ウトご 如 何 なるも 0 か

及びその 起源ご目的

明大、スカウト

を記して見ようと思ひます。スカウトは雑然たる市街を歩くよりも、山野を歩く事をより以上好む。 スカウトは種々のサイン、又は星の名稱、その位置等により、東西南北を知り、彼等の進むべき方向 先づスカウトとはざんなものかといふ事を書き、そしてその起源等を記し、スカウト運動の概念だけ

自己の身心の强壯を常に心がけて居る。そして自己の爲め、世の爲めにつどめて居る。然し前記の訓練 は多いやうで、單に一部分に過ぎない。 を知る。その外、繩結び、救急法、追跡法、又は水泳、キャンピング、自然科學等の實地訓練により、

「そなへよ、つねに」(BE PREPARED)

常に備へて居るといふより外あるまい。一言にして云ひつくすには除りに難事である。 之は我々スカウトの標語である。之からしても、我々スカウトの為す範圍が、如何に廣大であ ることが出來る。要するに、スカウトは總てに備へる。そして自己の為め、世の為め、 國の爲めに、 るかを

偖は此のスカウト運動は如何にして起つたか、而してその目的は?

現在英國ボーイ、スカウトの總長たるパーデン、パウエル将軍(Robert Baden Powell)が、スカウト運

する各種の書籍を著はし、此の運動を世に傳へつゝ、自ら少年を率ゐて、訓育に從事し、今日に至つた に至つた。茲にスカウテイングの心理的基礎を見出した。而して將軍は一九〇二年、スカウト運動に關 事業に從事するを見て、將軍は之等の責務が、少年の熱し易き活潑なる性情に適して居るものと考ふる 結果町の少年を傳令、斥候、その他の仕事に從事せしめたるに、少年は非常に興味深く、熱心に、その 軍が南阿戰爭(一八九七)の際に得た經驗であつた。將軍がメフキングの町を防禦した時、守備兵不足の 動を主唱したのは、一八八四年の事であつたが、その實際運動を起すに至つた近因とも云ふべきは、將

あつた。之が强く將軍を動し、「健兒社」の内容を基本さし、吾國の美風良俗を採つて、新しき「スカウ は舊藩時代から、藩内にあつた武士の子弟の修養團體であって、教育の基本は大和魂、武土道の精神で Seas)によつて知る事が出來る。甞て將軍が日本を訪問した時、鹿兒島に於て「健兒社」の內容を觀た。之 」なる関体を創設せしむるに至つたのである、 然るに又此の運動の原因が、日本に發して居るといふ事が、パウエル將軍の著 (Boy Scout beyond the

吾が皇太子殿下御渡英の際、將軍から親しく殿下に申し上げた言葉の中に、

間に仕上げょうとするものであります。従つてその訓育の如きは、日本武士道の真髓を採つて、之を ボーイスカウト運動は、少年をして名譽と愛國との觀念を信條化せしめ、精神、身體共に、强壯なる

國にも明治四拾年前後から、「少年軍」「少年團」とか、「少年軍團」とか云ふ名稱で、盛んに傳へられ

スカウテイングを通じて、種々の教濟策を試みようとして居る。それを表示すれば、 スカウトの目的は、物質文明の弊を蒙つて、現代の社會に現はれた欠陥を、次代の國民に残さぬやう イスカウトの精神で組織され訓育されたのは、七八年前からである。

| 日主義 | 最高というの表演集を試みようさして居る。それを表示すれば、| (原因) (根元)(防禦策) (救濟策トジラ「スカウト」訓育) | 民的能率不振) (原因) (根元)(防禦策) (救濟策トジラ「スカウト」訓育) | 民的能率不振) (原因) (根元)(防禦策) (対濟策と対方に対して居る。それを表示すれば、 ト貧困 罪 願ミザル 準橫 ラザルコ ノ無視・ 瓜 酒 ノ欠如 一成 人格ノ養 を 通道の 一個人的國家奉仕 一下記述理ヲ 個人的國家奉仕出入了扶助スルコト

体神兒潔健 的的之 床 欠欠死 陷陷亡 ト無責(學智織欽乏 (康ノ養成)自己ノ身体發達ヲ基準ニ達セシメントスル責任親ノ無)衛生學及生理(肉体的健)戸外運動

植ゑつけ つものは 他あらゆるもの ウエル將軍は物質文明の弊より、少年を脱せしめんがために、人間の機械化を痛嘆して、新しく育 ようといふ考で、スカウト運動を創始した。從つてボーイスカウトの用語、作業、競技、その 、お互にその個性を尊び、機械よりは自然に 親しみ、自然を 愛して、そこに人間愛の芽生 を に、 きらびやかな文明的のものよりも、 むしろ原始的なものを採用するに至つたのであ

てゐる。 練兵機械」に非ざる、 た事に誤りなく、此の方法に依つて、訓育された少年は、唯に立派な兵士となつたのみならず、 進展させようとするのにあるのであるから。世界大戦に依つて得た經驗は、此の策を吾々が實施し來つ 「吾々の訓育は軍隊的ではない。多數の少年達の團体が行ふ普通の訓練でさい、最小限度の必要に止め 最後に此のスカウト運動が、軍隊的でないさいふことを、將軍の著の一部を以て説明しよう。 何故ならば、訓練と云ふものは、個性を壊ち、然も吾々の主たる目的は、各個人々々の品性を 信賴し得る訓練の行き届いた闘士たる事を示して除りあった」との

練が、 用した一部を、世人は全部と考へたからである。 たべ今日で、我々ボーイスカウト運動が、軍事豫備教育の如く見られたのは、その少年達の團体の訓 最小限度の必要の為め、利用する軍隊及び軍事教育の一班を利用する為めである。そしてその利

ポーイス カウトは年齢により次の如く區別される。

ウル フカップ(Wolf Cub)—十一歳以下

スカウト(Roy Scout)—十一歲以上十八歲迄

生の行路に進んで行く事を意味する」 ロバーと云ふ意は、「人生の漂流者」といふので、我々は人の指導を受ける境遇から出で、獨立獨步人の、ロバースカウト(Rover Scout)し十八歳以上

現在主唱されるスカゥトが、こんなものであるといふ概念を、不統一ながら認め、

一名 の日本の日本の日

る精神を体得し、之を以て自己の不安定なる内心を照し、自己の自己たる所以に成功せる人を見ば其表面に表はれたる事業の跡を見るよりも、其裏面に潜めを信じ、精神を之に集注して自己の真價を發揮せればならぬ。社會百般の事業 の特徴を競揮するに資する様つさむることが肝要である。―駒田 卯三 郎 質を備へて居るのであるから、徒に他人を模倣することを止め、他くまで自己 **た有する或物が必ずあるのである。即ち吾人は誰でも平凡の非凡人たり得る素人は如何に平凡なる者さ雖も、何れかの方面に於て他人にはなくして我のみ之**

0

は不相變暑中休暇中の宿題(小品女)を載せるこさにし

第一學年 松

勢瓶の軋る音に不圖目を開いた。 外は早眞明だ。軒に吊つてある籠が明るい障子に はつきりとうつゝてゐる。隣の鷄小屋からは雄鳥 の鳴壁が聞ねる。 になつて障子を開けた。強い である。 の下かららは長い首を出した。 こっていさん早くお起きょ」庭の方で弟の聲が した。 で見いさん早くお起きょ」庭の方で弟の聲が した。 で見いさん早くお起きょ」庭の方で弟の聲が した。

眞 畫の陽

第一學年 玉

の周圍の梅

線側の上に、雑誌が置いてある。陽が嚴く照りつけて眩しくて文字も禄に見にない。庭の周圍の梅や、椿の木には、だるさうな聲で蟬が、ジィーンと啼いて居る。 同になつて、寢てゐる。名を呼んだら、啼いたかには、二重もくげの、桃色の整を出した。築山の後には、二重もくげの、桃色の花が微かな風に戰いで居る。 庭の熊石の傍には、赤色の、葉鷄頭が陽に照らされて、燃わる様な色をしてゐる。其の中に混つてで居る。

一學年

識の様に降つてゐた夕立はからりと晴れ

した

して、 東の た天は現れた でいてゐる。隅の燈籠の上に、かれの葉から落ちる、雨だれの為にの本はなは一段と雄々しい。 の本はなは一段と雄々しい。 草は青々い

して、松の木はなは一段と雄々 な穴がうづいてゐる。隅の燈籠 な穴がうづいてゐる。隅の燈籠 庭のくぼたまりの水に、けい 庭のくぼたまりの水に、けい 、青空の寫つてゐるのとはいてうの赤い花や、相がへをしてゐる。

0) 玉が宿つてゐる。 い。木と木の間に掛つてゐる蜘蛛の巢にも、 12 1

第一學年 中

下して居たのである。僕は何んとも言へないなつと山との間を走つて居た。雲、雲は實にけだかいすの群が僕を見下して居た。雲、雲は實にけだかいすがよしい姿をして居る。今その夏の雲が僕を見がして居た。なにげなく窓から山の下して居たのである。僕は何んとも言へないなつ

東の山へかくれてなっまで真白にか

光線がかい ぼが泳いでゐると、 なが泳いでゐると、雲のきれまからさつと太陽の 一さとした緑色を見せてゐる。 にいきくした緑色を見せてゐる。 にいきくした緑色を見せてゐる。 にいきで真白にかはいて居た土は褐色になつて、 にいきで真白にかはいて居た土は褐色になつて、 の山へかくれて行く真黒な雲が池の中に寫つて

第一學年

ほ母朝 0 木んの靄がや使が かゆるやかにゆれる。と、かゆるやかにゆれる。当岸の家々が遠くの山を包んでゐると に切れる。さ、すいに切れる。さ、すいに切れる。對岸の家々の たいてあるのボブル 大小の電燈の光が水水々の電燈の光が水水水

りながら 大きなあ さ聲を かだ。夜はどとなるののででをして出て來る。 夜はだんと 明けて行くのあたりは

> や年分は山にか は山にかくれて居た。 は山にかくれて居た。

一學年

のよ朝 は白絹で包んだやうであります。四方りには一面に朝霧がたちこめてゐます。四方

まわりには一面に朝霧がたちこめてゐます。四方の山は白絹で包んだやうであります。
が、水はゆるやかな音を立てゝ流れてゐます。
が、水はゆるやかな音を立てゝ流れてゐます。
のようにボーと咲いてゐます。前の小川へ行つて見れば、水はゆるやかな音を立てゝ流れてゐます。四方

夕立の のかののの

- 事 あ 學年 末武

一梢 ばか 2 ないになって、ふなはうれから事がぼとくして油のから で人へと池の中に落ちた。池の水は れしさうに泳いでる 000

秋ももう近い。 冷い風がポプラを通っ かに聞い出して來た。又朝の

0

第 一學年

日が「カン (〜」と照りつける。汗が背中をじた(〜させて、着物が背中にくひ附いてもう歩けない。帽子から汗の臭がうるさく鼻によせる。風ーン無い小筋を水泳衣をたらして「ギラん〜」照りにに下つて折々「ビカリ」と光る。宿屋の臺所の鉢店に下つて折々「ビカリ」と光る。宿屋の臺所の鉢店に下つて折々「ビカリ」と光る。宿屋の臺所の鉢店のうく鳴つて「ゴドー、」汽車は萩籐を出た。自動車がむし暑い煙を出しながら通つて行つた。自動車がなした。で家に飛込んだ。横道に入ると日か一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとの一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとの一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとの一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとので家に飛込んだ。横道に入ると日か一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとの一層力を加へた様な氣がした。クスリはキシとのである看板が掛げてある下に、水泳の繪が書 H

い幕 店の かる 四時をうのが、少し

0

水だ、

たん

6

K

0

どかう へなは の東のくた雲げ 。やがしか に彼つ 、方 た すにタ い少立第ししは一 い残は學風のれ年 風になる。薄のである。 は生き L 72

雨はば東後いだら南 た。西動 一と輝く。風がふくとその玉はころく~ところでありまぶしい 太陽の 光をうけて、銀色に きられたれただんと鮮になつてゆく。 はんだんと鮮になつてゆく。 はんだんだがない ないまの葉がゆらく~とゆられて、葉の上の露がいるの葉がゆらく~とゆられて、葉の上の露がいるの葉がした。 東北の山間から

て、石 の上に落ちて四方にちつた。

-

光 A

> なが時智 胸父、 今家 にう好 は、何をし ぬ郷の空を眺めると では、故郷 かんで来る、無森、森、 を出っ しもり 野、 3. かしい いか 汗が又出る。 、店屋で

れるの

が僕

一休みし

9

0)

1

がたまつてそれにかな空でうれしくかな空でうれしくかなってそれになってそれになってそれになってそれになってそれに しく 古ながかなっといる。と となき 。 くの 義 タ立も、やきばじ 中まで雨

さき程降つた雨

すかなないないない りない でない。人間までも生きかへつたやうな氣がは皆生きかへつたやうな色が見にる。草木ば美しい色をしてゐる、數日間雨を見なかつた

第 一學年 田 正

ゆられた。 しようで をしようで をここを をいるがは でいるがは でいるがは でいるがは でいるがない。 でいるがは でいるが、 でいるが らのゆい赤をしよる。いるのは、からないしょう。 一枚くつた。冷たい朝風が顔に當つている心 造んだ空にはまだ星がキラ (と光つて居 がは忘れたやうにはまだ星がキラ (と光つて居 がは忘れたやうに生々として居る。 巨人の手 がは忘れたやうに生々として居る。 巨人の手 がたやうな八ッ手の葉にも可愛いゝ小さな の青い葉にも露の玉が光つて居る。 「ウメモ の青い葉にも露の玉が光つて居る。 「ウメモ の青い葉にも露の玉が光つて居る。

日 0

第 一學年 彦 德

なった。 10

あたりはやゝ凉しくなつた。蝎の聲も何處からとなく聞に不來る。 となく聞に不來る。 となく聞に不來る。 なの波の上を滑べつてゐる。 少日は半ばかくれた。沖の空は異赤に照りはに でもる。近所の子供が「夕焼小焼あしたあ天氣に なーれ」ご歌って夕日はすつかりかくれた。 僕はそれをうつどりした氣持で眺めてゐる。 僕はそれをうつどりした氣持で眺めてゐる。 でなるを仰ぐと、星が一つうす赤い空にまゝた いてゐた。 72 1: 12

物倦 1. 眞夏の午後

一學年 宮

2 い窓 て來る 3 な暑くろしい風が、力なでもしてみる。 力なげ

本の葉は全く生氣を失つて、酒酔ひの千鳥足の様に、ひよろく~とかすかにゆれてゐる。やかましい蟬の鳴き聲は、私の休暇勉强をさまたげて頭をさす様だ。 「カンカンカン……」と眠さうな大工の木を打つ音も、子供のさわぐのも、みんな蟬の鳴き聲と一緒になつて、うとく~としてゐる私の耳もとに絶にず運んで來る。

第一學年 澄 遊

120

白々と夜が明けた。

い色の山が傲然としてそばだつて居る。蟲の聲が聞わる。総ての物が靜かだ。

近くの物が皆自分の色にかへつた。人通りもださこかで鷄の聲が聞たた。

なけ うと思へば、進歩の原動力、即ち元氣を盛んにしかしくなる。それ故に、荷も自分の目的を達しよ ればなら ないの

第二學年

さつばりした薄赤のラジオ 擴 聲機の 様 な朝顔が、今朝一輪咲いた。緑づいた葉陰に、一層目立ので見たる。僕の毎朝の朝顔に對しての苦心の報でいる功を立てたのだ。或時は友達の蜂にさいれた時なごは、此の葉をおしますばかりでなく、又大なる功を立てたのだ。或時は友達の蜂にさいれた時なごは、此の葉をおしますばかりでなく、又の汁をつけてやつた。又或時は友達の蜂にさいれた時なごは、此の葉をおしますもいで、友達に其た。箱で横の様なものを作つて、家人を樂しませた。 る 明日は又幾つ咲くだらうか。ものを作って、家人を樂しませた。

岡 鰖 E 信

> も聞わた て「ボー」と聞 「ボー」と聞いた。し しばらくして電燈會社の汽

空は次第に紅色になって行く。ごこかで小鳥が ないた。六時の鐘がしづかになった。 紅色の空がだんがくと金色にかはつて行く。忽 上から出た。 山の頂忽

元

第二學年 黑 磯

學問をなし、德を積みて、自分の目的を達するには、元氣より大切なものはないと思ふ。實に元がなかつたら、如何に其人が才智に長けて居ても、如何に德がすぐれて居ても、成功を見ないで、空如何に徳がすぐれて居ても、成功を見ないで、空しく志をいだいて、墓穴に入るに到るであらう。しく志をいだいて、墓穴に入るに到るであらう。進步は丁度高山に上るやうなもので、我々が一歩々々進步すればするほご、その先の進步はむつ歩々々進步すればするほご、その先の進步はむつ

孝は百行のもと、凡で今日世に立ち社會の尊敬を受けついある者は、皆父母を愛敬し、孝養の心格のないものはない。父母の心配を熟思するに、先づ、我を産み、我を哺育し、我を教養し、暑きに、寒きに、朝に、夕に、心を配ばり給ひ、漸く成長して學校に入れば、その成績を氣遣ひ給ひ、事をない。これを思へば、少しでも父母の心を安じ奉なやうに心掛くるは、自然の至情である。忠臣は孝子の門に出づと、孝を盡せば自ら忠となり、忠は自ら孝となる。忠孝一本である。農工商の職業に従事する者は、其の職業に勉励し、我々學問にたづさはる者は、其の職業に勉励し、我々學問にたづさはる者は、之を研究錬磨して、我が國の文にでする。忠正は、妻子の門に出づと、孝を盡せば自ら忠となり、忠といる。 明を める事はさしあ たりの忠孝であ

田

一分は夏の朝特有なものである。
後芽生の露踏みしめながら、庭をさ 庭をさまよ 込む。この

るのみであきるのみであき、 をのラッパ形は大きく、軟らか なのラッパ形は大きく、軟らか な場色の葉がぐらん〉を動いてゐる。 な陽が東より出ると、今までさも暑さを知らなかつたやうに咲いてゐた朝顔が、初めて暑さを知らなかったかのやうに、いど口惜しくしばんだ。それに對象したかのやうに、いど口惜しくしばんだ。此の邊にて、後邊であらなが、ないとかでは、一个であった。此の邊にて、後邊であらなが、ないとは、一人と地へと歩をする。

か指た名す月。高晴

で、歴々として四海に滿ち溢ふれるであらう。であらう。あゝ、エジソンの澤は、將來に至るま話を何とも思はぬが、古人は夢にも知らなかつた

忠

第二學年

ますなければ、忠を盡す事が出來ない、又親の膝 いてゐるが、殊更に我日本の國では、昔から之を いてゐるが、殊更に我日本の國では、昔から之を いてゐるが、殊更に我日本の國では、昔から之を なり」とある樣に、孝は吾々の務めなければなら なり」とある樣に、孝は吾々の務めなければなら つて行 勿論それい くする 2 ののは れは忠又孝である。然しそんなにしなくとくされば、孝でないと思つてゐる者がある。 ば孝となるのである。 に、君にもつて行けば忠となり、親にも同じ者で、君子事、親孝の故忠可、移二於君 が、忠 、忠であり、自ら孝である。忠と孝と、業、農夫は農業にと、各自分の務を全 に忠を盡す者であ 故に親に孝を盡す 忠と孝と

> げにあ たなれたさ、 振り に朽ちぬ花、地に 七日の月は中でよるよと吹い 花、地には此處に不斷の香が湧 基層、 海邊のは 一面に輝き渡つて、の松にやさしき音樂をの松にやさしき音樂を

電

第二學年 久

何が人世に利益を與へて居ると云つても、電氣に如く物はあるまい。蒸氣は汽車汽船を始めとし、百般の機械を運轉させる。電氣には、之に勝るとも劣らぬだけの利益がある。蒸氣が汽車を走らせられるであらう。近來發達した電信電話も皆電氣の力である。其の外、電氣を發明したエジソンは、若所ではあるまい。電氣を發明したエジソンは、若所ではあるまい。電氣を發明したエジソンは、若所ではあるまい。電氣を發明したエジソンは、若所ではあるまい。電氣を發明したエジソンは、若

水 0) 都 0 町

中國山脈を背後に持ち、中間平野に位する萩は、水上に遊ぶにも、或は登山するにも都合よき事は別は、萩町を三角洲上に取りまき、舟遊びや、魚釣りにも、交通にも関をつき抜けて流るゝ一帶の阿に沿いで居る。海岸の景、山間の景、同時に眺むる事が出來る。若し山間に住む人、川を下つて萩原にも此ずでき六島村を遙に見渡し、又水泳場には菊ケ濱があり、何一つ備はらぬ物のない此處を如何に思ふであらうか。交通上から云つても、今を正明市線は延長して萩に及び、其他の鐵道線路や正明市線は延長して萩に及び、其他の鐵道線路を正明市線は延長して萩に及び、其他の鐵道線路を上げた。 萩は日本海

支那で交通連絡の中心地となるであらう。

夏橙

の銀閣寺である。

秋の港

第二學年 三 好 謙 介

和樂の中心の氏神のおはす所である。 い神苑には、松の落葉が地上一面をおうてゐる。 文第に暗く、本殿の兩側には老杉の相参はるを見 る。鎭守の祭に相撲をとるのも此處、芝居も此處、 文一且緩急の場合に際しても、村人は皆この神社 に祈るのである。懐しい鎮守の森こそ我々の團結 和樂の中心の氏神のおはす所である。

我が村の傳説

第二學年 田 中 茂

一百年間きました。橋本、松本二川の水、漫々としまで開通して、産業發展を促してゐます。海には汽船が定期に航海して、変進の發達を期してゐます。 一時通して、産業發展を促してゐます。海には汽船が定期に航海して、交通の發達を期してゐます。 一大缺點は、港淺く、波浪の荒いことです。 一大缺點は、港淺く、波浪の荒いことです。 一大缺點は、港淺く、波浪の荒いことです。 一大缺點は、港淺く、波浪の荒いことです。 一大良港を造れば、
本町は

海陸の交通相待つて、萩は大商市になるでせう。は滿鮮地方との關係を考へるがよいと思ひます。「萩町の運命は水にあり」と云ふも過言ではあり

鎖守の森

第二學年 吉 屋 安 雄

の石燈籠を左右に控へて、石段を上りに上つて行といろに幽邃の感の起るを禁せられない。十數餘幾千年を經たかと思ふばかりの老松茂り、天を摩

と同時に「た妙何處へ行つた~」の聲が開を縫うて消れて行つた。其の後浪人の死体は上らなかつた。今でも旅人が其處を通ると、よく其の聲を聞た、今でも旅人が其處を通ると、よく其の聲が開を縫うた、今でも旅人が其處を通ると、よく其の聲が開を縫うと、今でも旅人が其處を通ると、よく其の聲を聞いた。

電氣

第二學年 岩 武 照 支

今ではどんな山間僻地でも。電燈の光を見ない 所はなく、電車、電信、電話等の使用されてゐる のは、周知の事實である、又無線電信や、近頃大 流行のラヂオにも、電力は是非とも必要である。 建熟器にも用ひられて、臺所仕事を助ける、更に 電氣機關車も將に出現せんごし、農村電化も高唱 せられる今日、電氣を理解し、利用する必要ある は言をまたない。

に比し、頗る安價で、簡便、清潔、且得易いため電氣は各方面に於て、石油、石炭、瓦斯、薪等

明で利益の多い方法はないと信ずる。 斯くの如く電氣事業の隆盛を來したのである。限 斯くの如く電氣事業の隆盛を來したのである。限

風呂たく煙のあちこちに上つて、日は僅に西方一帶を紅色に染めてゐる。鎮守の森は西山の麓に夢界の金箭を發して、名殘もなく沈み行く。折しも聞ゆる黄昏の鐘の音は、萬頃の緑田の上に流れてか、稻穂は微動してゐる。かくて此の鐘と共にでか、稻穂は微動してゐる。かくて此の鐘と共に不和の一日も暮れ、村は薄紫にけぶらうとしてゐる。小高く鬱蒼としてゐる鎮守の森から、淡い電 鳥がじつと止つてゐる。丁度墨繪のやうに。淡燈の光が見た、境內一の大木、欅の梢にさつきる。小高く鬱蒼としてゐる鎮守の森から、淡いて平和の一日も暮れ、村は薄紫にけぶらうとして てを見下す夜の監視者か。二つのもの永久に我邑光、そは鎮守の神の惠の光か。墨繪の鳥、そは総

にさつきの

中 0

は淡い夢から醒めた。何もかも皆夢の様だ。喉がら立つた。母は青白い顔して、心配さうにコップにら立つた。母は青白い顔して、心配さうにコップにら立つた。母は青白い顔して、心配さうにコップに下、治院である。 登は朝より心持がよい。 蠅が破れた でいたのでは、 一番になって、 一番に中で、 一番になって、 一番に 中で、 一番に なって、 一番に なった。 これを なった 犬の を閉ちた。 上を照し、 遠吠が耳に立つ。 虫の音 體のふしく が物淋しい。 夜は電燈の光が淡く頭 第二學年

夕

第三學年 桂良

> を守れ。 かくて我邑は平和に生くるのである。

我が村の傳説

第二學年

東側い窪みがある。其の石は少し川上に傾いるて、あをさや苔が多く附いてある様に、其處は除程流が静かです。此の石こそ、何百年も昔、此處に大きといふ非常に大きい寺があつて、その寺の山門の礎石であつたと傅へられてゐる。他の一つも多な大きい石を使つたとあれば、其の寺の建築の規模が、如何に大きかつたか推察せられる。星霜幾模が、如何に大きかつたか推察せられる。星霜幾春に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名にあんなたきい石を使つたとあれば、其の寺の建築の規模が、如何に大きかつたか推察せられる。星霜幾春に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々と此處を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も出場を大寺といひます。此の寺名に残り、我々も出場を大寺といひます。此の寺名に対している。 其の石の真中に、直徑二尺五寸、深さ三寸許りの地に沿うて、大井川が緩やかに流れて見るい。 沿うて、大井川が緩やかに流れて居る。川のの家から東南二町許り行くと、一町歩位の田

鏤めた様に、無数の星がきらきらど光を放つて居る。白い夕顔は靜かに咲いて、晝間の蟬は何處にかすべておさまり、秋を思ふ蟲の聲が聞にる。にかすべておさまり、秋を思ふ蟲の聲が聞にる。 で居る。空は好く澄み渡り雲一つも無い。樹々を もれて來る山の端の月の光を浴びながら、益々高 く登る月を待つて居ると、暗い空は刻一刻と明く なり、今迄で誇つて居た星も、もはや光を消され で去る。と、間もなく月影は金蛇と變り面白~踊葉の玉を碎き、軒の風鈴を訪づれて。池の面をなて只萬物はすべて明である。時しも一陣の清風草 つた。と、間もなく月影は金蛇を變り面白くで去る。と、間もなく月影は金蛇を變り面白く られ蚊 空には賓石 ない。團扇を片手にして出て見ると、薄暗いと蚊遣の煙とに攻められて、とても家には居 **園扇を片手にして出て見ると、薄暗い**

の旅

第三學年

層夏の暑さを増す。ガラと、空車を引張つて過ぎ鳴ぎ鳴ぎ峠を登つた。ジージー鳴く蟬の聲が一 大祇疲れる事だと、ジーと見めつて居る

からりで晴れた大空には憎らしい程太陽がかんく、照り付けて居る。然し東の方には眞黒な雲がたなびいて居る。一足蓮ぶ度に土煙が上る。足を見ると真白だ。服の上に滲んだ汗が黑くうねのやうに見ら、誰の額にも豆粒程の汗が浮いて居る。 でうやら雨模様になつた。時計は五時過ぎ蜩が鳴き初めた。まだ見ぬ所を、色々に想像しながら、一步一步、土煙の中を急ぐ。 になくなった。午後の二時だ。

0

第三學年 木

かな水、又朝の散步に野路の朝露を踏む時の心の層を強い、岩間を傳つて下へ(と流れる谷川の清ら満るやうな木々、木の葉を撫でいそよ)(と吹く源の美に包まれた山中、その夏は實に凉しい

を思ひながら、家をさして步を進めた。凉風はしる後の幕を閉ぢるのだ。永却に歸つて來ない今日(暗くなつた、此の樣にしづん)と、今日一日はて宛然淡墨でばかした樣だ。質闇が迫つて、全 さりに袂を飜す。

第三學年

に應じ、M君と共に海路を鯖島に取つた。舟は追風に概任せ、夢の間に彼の地へ着いた。好い網代を見付け、百匹位捕つて、遂に餌が蓋きた。そこで今度は餌を求めに、或一つの淵に行つた。その一帯は鯖島中で、最も景の絶佳な所であるらしい。 出嘴水際に突出し、或は斷岩の削立するもの、名 書家と雖も、詩人と雖も、筆舌のよく蓋す所では 上れば、あたりは一望の下にある。大嶋の如きは 上れば、あたりは一望の下にある。大嶋の如きは 上れば、あたりは一望の下にある。大嶋の如きは を散らす。又背景は全山緑で蔽れた鯖嶋を加へて 君から提灯網を打ちに かね かどの誘

> やかな月に照され れるのも凉しからう。然し山中の見の凉しさ。平和まり山の方が勝れてゐる、勿論離れて何處かへ消に去る。 とり山の方が勝れてゐる、勿論を浮べ、大洋を渡つてくる

動の音樂……。あゝ!! 山中の夏 の表現とでもいはうか……。 たみ等は自ら心を離れて何處かへ 夏の凉しさは海より山の方が勝 海風に頬を撫でられるのも凉しか の凉しさにはさても及ばない。 悲

第三學年 田

石をも熔す炎熱は、いつしか去つて、鯛がやかましく鳴き始めた、薄白い靄は静かに夕室を流れてた。馬車を引いて樂しさうに唄を唄ひながら歸って行く人もあり、鍬をかついで家路を辿る農夫もある。家々の風呂の煙突から立ち登る煙は、夕風に煽られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に煽られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に演られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に演られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に渡られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に渡られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に渡られてふわり~~漂うて居る。太陽は全く西に渡した。一入京味に満ちた四方は、靄に包まれ

居るので格別である。四園の景に恍然として居た 一刹那、一陣の冷風は海上より來り、我が頬を撫 一刹那、一陣の冷風は海上より來り、我が頬を撫 をすで、思はず萬歳を發した。 K 君の呼聲で我に のが地よさ、名狀すべか

第三學年

汽車は停車場に着いた。赤帽が荷物を擔いで走る。客車からは澤山の人々がゾロん〉と吐き出される。僕は人波の中を分けて狭い改札口から車のボラリと並んで居る廣場へ出て、ホット一息する。 時は丁度正午、中天からはお日様が烈しく照りつける。ギラん〉烈しい光線を反射する大路の小石を踏んで、半里ばかりの間汗をしぼるご、懐しい家門につく。裏のボプラには油蟬が盛に鳴き立てった。弟や妹は水泳に行つて留守であつた。そこで、母上が出迎へて異れた。井戸端で満身の汗 茶を持つて來て吳れたのを流してから、風通しの よい 漸~元氣づい

いて、夏の長い日の西に傾くのを覺になかつた。梭の話、郷里の話、それからそれへと果しなく積

200

第三學年 水

の葉をサラー、鳴し、其の度毎に裏の家の登らい、一同揃つて食事の膳に向つた。前の青田からし、一同揃つて食事の膳に向つた。前の青田から 步した。

青田一面に夕陽が映じて、 チラー、見にる。友達に誘はれて田圃の小路を散 し、一同揃つて食事の膳に向つた。前の青田から末の弟の水打がすむと、座敷中残らず建具を外 向の森も赤く染つた。 稲の葉も莖も

薄暗くなつて來た。 だのだ。ボチャリー~續いて其の音が起る。段々だのだ。ボチャリと音がする、蛙が驚いて溝に飛び込ん

今に月が出るだらう。

第三學年 辻

凉しい風がそよくと類を撫でて去つた。半ば

つかし味を覺にた。我に歸つて、兩側の神木に蔽 ひかぶされて、薄暗くなつて居る石階を登り出し た。そこには何とは無い畏敬の念が湧出した。今 までの追憶は覺めて、身躰一杯畏敬そのものゝ様 に、自と襟は正された。爪先上りに上つて、敷石 を踏み、遂に社の前に來た。神前の鈴を鳴し敷石 がら我が家に向つて、ホットした樣に靜かに足を 速めた。

第三學年 河

しき勇士の断さい。 しき勇士の断さる、 を以て、何憚の を以て、何憚の を以て、何憚の を以て、何憚の を以て、何憚の 鳴ぎ疲れて居る時に、猶よく暑さど戰ふ彼等の夕の鐘の靜に鳴り渡る頃迄も續いて、全く好い。しかもその聲の偉大さ、あの小さな体好い。しかもその聲の偉大さ、あの小さな体好い。しかもその聲の偉大さ、あの小さな体好い。しかもその聲の偉大さ、あの小さな体好い。 らねばならぬ。しかしそれは、 魔の悲痛な叫びの様にも聞

> と見いる。「ネンネーコローリーへ」と明ふ聲が絶 光を浴び、口笛を吹きながら庭中ぶらついた。月のい風がざわらしと吹いて、誠に氣持がよい。月の い風がざわら~と吹いて、誠に氣持がよい。月の光を受けて、水晶の様にきら~ 光つてゐる。凉園い月が出て、淡白い光を投げてゐる。柿の葉が復習にも飽きたので庭へ出た。彼方の森の上には 報じた、思はず長遊びをしたのに氣附いて家内にたず聞いて來る。チントーと母屋の時計が十時を 子守唄を唄ひなが居るのが垣根の間からチラしては大分高く昇つてゐる。隣の婆さんが孫を背負ひ 入つた。 復習にも飽きたので庭へ出た。彼方の森の上に

第三學年 金

又、田面の緑色を波立たして吹く風にも無限のな去の昔を顧み、小學時代の事までも思ひ出した。過り回つた。我がなつかしき村を一目に見下し、過 手水鉢の所まで來た。其處で一息し、一寸後を振長い石階を、元氣にまかせて、一目散にかけ登り、早朝起床して、輕い食事を濟し、散歩がてらに

て居た一代の英雄も、末路悲しきものは、斯迄になく地上を見た。おゝ何たる悼ましき事であらなく地上を見た。おゝ何たる悼ましき事であら蝶を捉へ樣をして、よう捉へなかつた僕は、何心 ならねばならぬものかと、 も見守つた。 と、引かれ行く蟬を何時迄 末路悲しきものは、斯迄に

第三學年 田

頻の なし。清風洒然として水聲潺々たり。石上に臥し松は高くして綠陰冷氣あり、水冷にして三伏の夏し。一夕、友人と河邊に到り凉を入る。この處、 流に嗽けば、 足らず。二杯のラムネは以て彼の凉を招くに由な爐中に在るが如し。一杯の氷水は此の暑を消すに伏の候、家にあるもの、あらざるもの、身はこれ 炎熱地を焦がし草葉皆卷縮す。正にこれ盛夏三 機を滌ふ。假合北の明月東山に昇り、 神氣頓に爽快を覺ゆ。 假合北海の氷、富岳の雪を以てす 須臾にして一

くるを知らず。三更急ぎ歸途につく。

展墓

第三學年 峯 岡 良 女

八月十八日、未明に起き出でゝ、父ご共に墓叁りした。曉の景色は麗しい。家を出ると、須臾して東方はバット真紅に燃た、美しいこと比類なかった。清風は耳朶を掠め、爽快なこと此類なから曲つた一里の峠道も過ぎ、小高い墓地に近づけば、側のお寮の尼さんの打つ木魚の音が何時になく心强く懐しい。掃除をし水を上けお花を取り換へ、線香を供へて墓前に跪いた。其の時父と共に居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなつた居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなった居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなった居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなった居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなった居る事を思へば殊更である。只數年前亡くなった

も、指月の左に太陽が沒する頃から、たまらなくよくなる。夕靄に包まれた連山から、凉しい風が経へず送られて來る。嫌な蟬の聲も最早止んだ。でだらしい自然の環境は、見るもの、音するもの總べてが、夕の凉しさを語つて生きくしさせる。夕の冷たいこと、美しい水に凉しい氣分が溢れて居る。海岸に出ると、はるかに玄海から寄せて來る波の冷たいこと、美しい水に凉しい氣分が溢れて居る。カ向ふから、誰のすさびか、かすかに妙なる笛のカーデーが流れて居る。夏の夕は真に好いものである。

人の力

第四學年 河 村 群 三

喉もと過ぐれば、暑を忘るゝとやらで、吾々は、つて、生命を繋ぐことが出來るのである。所が、す間の萬象を造つた。吾々は、この自然の力によ

雨後の月

第三學年 藤 井

ち。 ・地上の草木、小川の流、皆月光を浴びて光れき、地上の草木、小川の流、皆月光を浴びて光れま、地上の草木、小川の流、皆月光を浴びて光れま、地上の草木、小川の流、皆月光を浴びて光れ

未だ宵なれば、例の通り、田圃を囘り、稻の香高き小道を通り、夕凉みに出づ。此處は雨後の蛙の 聲殊に盛なり、小高き丘には、微風吹き來りて、 世はや此處に哀れなる蟋蟀の聲あり。月は高く、世 聲外に盛なり、小高き丘には、微風吹き來りて、 世上りて此のよき月を愛せざるはなし。風凉しく 空益々霽れ、月愈々冴に渡りて、身心正に爽快な

いしきタ

第三學年 香川保政

な山と川ミ家と橙畑、その山と川と家と橙畑の萩私は電燈のつく前後の萩が好きだ。晝間は單調

る。そこに、人の力の偉大なることが知られる。 がたみを感じないのである。實に、人の力は、こがたみを感じないのである。實に、人の力は、こかにみを感じないのである。實に、人の力は、ここの偉大な自然の恩惠に慣れて了つて、その有り

微功を積め

第四學年 秋 山 晃

人は、他人の成功を見て、とかく、直に、かくの如き大功を立てようさあせり、其方法を考へようさするが、詰りは、失敗に終つて止むのである如何に小なる悪事にても、唯これだけの事がとて、原人さされるのは、悪の方面では、功を積むものが少い。如何なる小なる功も、確にせずして、小量少い。如何なる小なる功も、確にせずして、小量少い。如何なる小なる功も、確にせずして、小量少い。如何なる小なる功も、疎にせずして、小量少い。如何なる小なる功も、確にせずして、小量

り、大功は、微功より出るのである。 績を舉げ、晴の會に、勝利を得るであらう。つま 動競技をするに於ても、日々唯一時間除の練習を 動競技をするに於ても、日々唯一時間除の練習を ある。萬事が、この通りである。運

學問は敏捷にして 京外年金森幸一

「青年老い易く、學成り難し。一寸の光陰、輕すべからず」とは、時の貴重なることを言ひしなり。 は、真に知言なるかな。徒に、時間を浪費すれば、以て、智識となすべく、 は、真に知言なるかな。徒に、時間を浪費すれば、 場に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから常に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから常に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから常に、 分陰を惜みて、 學問とも、何の益かあらん。故に、 吾等は、 一章に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから常に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから常に、 分陰を惜みて、 學問に敏捷ならざるべから むらず、 功積りて大に、久しからざれば、その功小成して 、卒業後と雖も、常に、有益なる讀書研鑽のみ。故に、學生の勉學は、唯在校中のみ

> 識は、 よりて修養し、己が從事する職業に必須なる智 特に修得に務むべし。

第四學年

處世の行程の起伏常なき、啻に、山川溪間のそれに比すべきのみならず。道德の山、人情の溪、 現れ、登れざも道窮らず、湖れざも源を見ず。一 環立て又一溪、一山盡きて又一山、その間に、 をする様、宛として修羅巷の如し。之を凌じべき るべし。もし中途にして修羅巷の如し。之を凌じべき もむ。天は、自助くる者を助く。世にありて敗者 たるに甘せば、愈々敗れて、永久に、急流に沈み、 たるに甘せば、愈々敗れて、永久に、急流に沈み、 たるに甘せば、愈々敗れて、永久に、急流に沈み、

第四學年 黒 磯 治 夫 「人の一生は、重き荷を負ひて、遠き路を行くが如し。急くべからず」此は、よく忍耐して機を待ち、遂に、大業を成就せし家康の言にて、書籍やち、遂に、大業を成就せし家康の言にて、書籍やは理によらざる、實地の經驗より得たる、意味深行地に伏すを見よ。恰も、吾等の前途に來る、総で、却つて、同事を反覆するが如く感せられ、也で起さしむ。その單調ならしめ、遂に、人をして倦厭の心を生せしめざるは、即ち耐久の心なり。とれての意と生せしめざるは、即ち耐久の心なり。とれて、方にの念を生せしめざるは、即ち耐久の心なり。とれて、方に、大なる發明、優秀なる藝術等、卓越なる事業は、皆この力なり「忍ぶことあれば、濟すこと

四學年

明治の大維新に貢獻せし防長の健兒の身に刻まれて金條となりしものは何ぞっそは土規七則なり。
で修養せられ、之によりて活躍し、之によりて意廣し。その道徳を説ける、一さして理到の言にあらざるはなし。松陰先生の學の要處、豊他にあららざるはなし。松陰先生の學の要處、豊他にあららざるはなし。松陰先生の學の要處、豊他にあららざるはなし。松陰先生の學の要處、豊他にあらし修養の助さなさざるべからず。

第四學年

して、天佑があり、幸運が與へられよう。あらゆ他人に依つて事を成さうとするが如き者に、どう天は、自ら助くる者を助ける。徒に人を頼み、

る困苦艱難に耐へ、逆境に處して、尙泰然として 自己の開拓に、不斷の努力を盡す者にこそ、最後 の榮冠は授けられるのである。失敗は人生の常で ある。一度や二度三度の蹉跌に、直に心を挫き、 をうする事が出來ない。千挫不屈の精神の人には 健度の失敗が、後には、却て、其人を導く、尊い 教訓と成つて來るのである。現今の青年たる吾々 は、旺溢せる元氣を以て、依賴心を逐ひ退け、萬 難に挫けぬ精神に依つて、獨立自活の行を全うす 。べきである。

言行一致

第四學年 中 原 吉 秒

ても、空想を避けて、科學的に根據を置き、十分 も、實行によつて、始て賢さない時は、理想も、 ぞれを、己が日常の行為に現さない時は、理想も、 完教も、一の戲に過ぎない。學問技術の研究に於 完教を 或いても、 完教を 或いても、 完教を 或いても、

者の心を合せた力の有無は、その結果に驚くべきとな生じる事がわかる。吾々國民が、一旦內憂外患に際して、一絲亂れず、共同一致の力の大を賴思に際して、一絲亂れず、共同一致の力の大を賴思に際して、一條亂れず、

耐久

第四學年 中 村 明

凡そ、事を爲すに、一時的に爲した事に、完全な事は少い。完全な事は、永久的努力で出來る。 世に、發明發見を爲んさして、その試驗を重ねる。 で、成功を望むものがある。それは無理である。 は、新聞配達、牛乳配達等を勤め、その試驗を重ねる は、新聞配達、牛乳配達等を勤め、その疲勞した は、新聞配達、牛乳配達等を勤め、その疲勞した は、新聞配達、牛乳配達等を勤め、その疲勞した とれが、耐久心ある學生の所爲でありたい。苦學 をれが、耐久心ある學生の所爲でありたい。苦學

に研究して、確に、實行の可能性を認めた上で、 地を社會に發表し、實行すべきである。實行の可能性なき空想は、絕對に避くべきである。實行の可能性なき空想は、絕對に避くべきである。もし、 事術技藝に對する權威がなくなるであらう。から 事等學生は、常に、言ご行とを一致させるやうに 自己の最善を盡すべきである。

衆心一致の力

第四學年 仙 波 武

「三人集れば、文殊の智慧」といふ事がある。これは、主に、才覺といふ方の事を意味して居るが、 三人集れば、又其處に力も生じる。毛利元就公の 矢束の話は有名であるが、近くは、日露戰爭に於て、我が國の捷を奏したのも、一に衆心一致の力に基くものである。聞けば、露兵中には、その時 中である。この上下の不一致が、露域を敗發に終事である。この上下の不一致が、露域を敗發に終事である。この上下の不一致が、露域を敗發に終事である。この上下の不一致が、

の苦學生である。そこに耐久の心があれば、真

士規七則

第四學年 脇 本 元

防長史を知る者、誰か、士規七則を知らざらん。 立規七則は、世界最大の教育家たる吉田松陰先生の、熱血を以て書きし、不朽の金言なり。 立規七則を讀めば、英靈の氣、躍々として、人に迫り、 愛國の情巳み難きを覺ゆ。是實に、松陰先生至誠の致す所、尋常一樣の文字に非ざるを知るに足らん。吾が校は、質に、七則中の義勇質質を以て校別をし、寄宿寮の各室にも、之を掲げて、士氣を 動舞す。かゝる、先輩の遺言に親疾する者、豊過 爾優逸して剛む所なかるべけんや。

言行一致

程、行ふは難いが、その言ふことが、もと、さほご「言ふは易く、行ふは難し」の言があるが、なる第四學年 神代 英雄

易いここではない。言ふは、その思想を言ふので 大思想がなければ、名言は出ぬ。孟子の論議は、 太子を待つて行はれ、カントの哲學は、カントが あって出來る。その言を實行しようとの誠意を有す なく、頻に、美言を口にし、世人を欺くに止る人 なく、頻に、美言を口にし、世人を欺くに止る人 なく、頻に、美言を口にし、世人を欺くに止る人 は、君子の唾棄する罪人である「論語讀みの論語 がなず」といふも、この罪人に對する叱責戒論の ヨである。

衆心一致 の力

第四學年

開く、鴻城の地、毛利元就公の偉績を永遠にたるを得たり、しかして、百萬一心の字を刻める記念は、その子孫に至りても、防長二州は、上下一致せ、その子孫に至りても、防長二州は、上下一致して、其力の發揮する所、明治維新の大業を賛くして、其力の發揮する所、明治維新の大業を賛くして、其力の發揮する所、明治維新の大業を賛くるを得たり、しかして、日清日露の二大役に、我

さも、油斷してはならね。塵も積れば山となるといふ事を思うて、微功たり時間といふ大なるものになるのである。何事にも時間としても、一年には六十時間、十年には六百

第四學年

りの換言すれば、自己にて、自己の目的を立て、依りて、精神の鍛錬を積み、其發展を圖るの謂な修養とは、他人の力に依賴せず、自己の努力に 時なし。隨ひて、吾人は、一生涯修養せざるべかその向上は無限なり。故に、自己を完成し盡すの總で修養期なり。何となれば、人には向上性あり。は、唯學校にある時のみならず、一生を通じて、 れを向上の一路といふなり賢は聖を希ひ、聖は天を希 賢は聖を希ひ、聖は天を希ふどいふも是なり。こらず。死して後に巳むとは是なり。士は賢を希ひ、 を達せんごする努力是なり。而して、人の修養期之を延ばし、短所は、之を抑へ、以て自己の目的 反省に依り、自己の長所と短所とを認め、其長所は

> 思くも、上下協
> 銀振作更張せよどの 部
> 書下れり。 の力の致す所にして、如何に其力の偉大なるかを の力の致す所にして、如何に其力の偉大なるかを の力の致す所にして、如何に其力の偉大なるかを し。然るに、近時、人心漸く輕佻浮華に流 となるがを からず。
> 西等は、この聖訓に格選して、益々質質剛健に進

め

第四學年

座のやうな細いものでも、積れば山になる。樹 を發でも、同じである。五分間や十分間であるか も、微功を忽にしなかつたことに歸するのであら も、微功を忽にしなかつたことに歸するのであら を發でも、疎にしてはならぬ。瀧鶴臺の妻の話 金銭でも、疎にしてはならぬ。瀧鶴臺の妻の話 のであら、微 集ると、谷川になり、大川になり、

衆心一致の力

第四學年 吉 賀 一 夫 は何ぞ。そは、わが身體の諸器管の、忠質なる協 は何ぞ。そは、わが身體の諸器管の、忠質なる協 は何ぞ。そは、わが身體の諸器管の、忠質なる協 は世界より、小は一家に至るまで、皆衆力の一致 を要求し、人類の幸福、家庭の平和に努力しつゝ あるなり。如何なる文明と雖、一致の精神なき處、 あるなり。如何なる文明と雖、一致の精神なき處、 かる強 一致結束せる矢となりて、金甌の祖國を、永遠に一致の力を强大ならしむべし。古の名將の矢の誠・第一の叫音として、尊き座右の銘として、此のき第一の叫音として、尊き座右の銘として、此の 守らざるべからす。

第五學年 波 多野

ローマは一日にして成らず」と、 然り真に然

たざ 努力に築かれた最終の結果であ

しては國家の成功である。世の事業の失敗、國力 の不振と稱する者は、皆努力の足らないものであ る。故に事業や又他の事に對して、運命の惡しく て失敗したと言ふものは口質で、努力によつては 其失敗の半は減せられるものである。 の不振さ稱する者は、皆努力の足らないものである事は苦しい。しかしそれが自己の成功の第一步である。その苦しさを忍ぶのは、やがては團体さである。その苦しさを忍ぶのは、やがては團体さの不振さ稱する者は、皆努力の足らないものである。努力す し其苦しみを耐 耐へなければ、車は決して坂上物にも代へ難い苦しみである。 車は決して坂上の者 る。しかであ

られた言葉である。

軍見て矢を矧ぐ

過ぐる世界大戦亂に、彼の年來少しの軍備も無 第五學年 井 Ŀ 宗

人を善化す。 大業を翼賛せしめ、中江藤樹先生はよく一郷の吉田松陰先生の威化はよくその弟子をして維新

々向上の一路を辿らざるべからず。偉人の感化は仰ぎ、或は古聖賢の傳記を讀みて之に私淑し、益 故に吾人は務めて先輩偉人に面接して其の徳風を 高き人物たらしむるなり。順境に逆境に常に吾人を善導し、吾人をして品性

0)

第五學年,小

白い紙の上に描寫したからう。藝術はこんな處へる。森羅萬象が、皆赤や黄に彩られるのである。がのものが、悉く色彩されて行くならば、人間は然のものが、悉く色彩されて行くならば、人間は然のない。唯無意識に見ては居るまい。誰しも一枚のうか。唯無意識に見ては居るまい。誰しも一枚のうか。唯無意識に見ては居るまい。誰しも一枚のうか。唯無意識に見ては居るまい。誰しも一枚の 術の愛好者である。 めて居る。 る。僕

> 吾人の非常の準備覺悟を要求して居る。吾人青年なりしも、大平洋の彼方には、常に暗雲低迷し、でもない。今や歐州の大戰は單に過去の一時變とでなく、百般の事業に對し必要であるのは言ふま此等不斷の準備は、唯に軍事に於て必要なるのみ る。苟も國家の發展に寄與する所があらうどする如何に不斷の準備の大切なるかを知ることが出來として常に攻勢を取つて居たのを見れば、吾人は治に、經濟に孜々として居た獨逸が、世界を相手かつた白耳義の惨劇に反し、常に其の軍備に、政 者は、不斷の準備を度外視して出來る事ではない。 態をなさぬ様にせねばなられる 身を鍛錬し、 は、 荷も國家の發展に寄與する所があらうどする 平時よく 他日有事の際、軍見て矢を矧ぐの失勤勉努力學を修め業を習ひ、以て心

第五學年 橋

誠に偉大なるものあり。
入はその四圍の事情によりて品性の上に大なる

恰も自分一人が天國にでも行つたか、理想境にできれたバレットを手にして、自然に對する時は、美化する處に、殊に僕の趣味はある。色のかき亂等も好きな者ではあるが、自然を愛し、又自然を も來て居るかの心地がして、 恍惚として我を忘れ

平

第五學年 田 村

はず。 人必ずしも之を目して絶對的平和なりと呼ぶ事能 世は一見大平無事に歸したるが如く見ゆれご、吾 世は一見大平無事に歸したるが如く見ゆれご、吾 はず。

和の戦争と言ふっ 前よりも寧ろ甚しきの感あり。吾人之を稱して平工業及び殖民等に於ける爭は益々激烈を加へ、戰不無疑罪雨の中に馳騙する戰鬪こそ已みたれ。商

きか。其の策他なし。勤儉强調、奮鬪努力にあり が國民たる者、 然らば吾人如何にして、平和の戰爭に勝利を得 一致協力して奢侈を斥け、情慢

め以つて平和の戰爭に臨むべきなりo 殖民地の開拓を計畵し、かくして富國 8 開拓を計畵し、かくして富國の基礎を堅大いに勤めて、生産力の増進を企圖し、

世界地圖を見て

第五學年

叫せざるを得ない。赤に染められた我國が、極東 の一角に弓なりに横る。體軀とそ小であれ。燦と の一角に弓なりに横る。體軀とそ小であれ。燦と 思想にも面白くない現象が多い。活眼を開いて亞 思想にも面白くない現象が多い。活眼を開いて亞 思想にも面白くない現象が多い。活眼を開いて亞 思想にも面白くない現象が多い。活眼を開いて亞 の一角に弓なりに横る。體軀こそ小であれ叫せざるを得ない。赤に染められた我國がを開いて見て、私は「奮起せよ、大和民族 を歐洲に張った。 土耳古はケルマ、 リムは、同志を率あて佛國の保護を離れようとし、 赤、薄桃色、 私は「奮起せよ、大和民族」で絶黄、青、種々に彩られた世界地圖 バシャの出現 によって、その威

思想は、全世界に充ちて來た。白閥の時代は過ぎ有色人種の蹶起する時代は開けた。白閥打破の

すべきである。 に有色人種の赫々たる時代を作り出すべく、努力た。第二の日本を背負ふ我等青年は、世界地圖上

通信機關の發達ご文化 第五學年 中

なり。 距でゝよく談話するを得るなざ、通信機關の發達依る通信の、一瞬によく遠きに達し、或は千里を思へば、轉令昔の感に耐へざらしむ。殊に電氣に を及ぼすものなり。而して通信機關の發達は、時機械の發達は、我々現實生活の上に多大の影響 は時と共に進み、事務は又文化と共に繁多を加ふの殆ご底止する所を知らざるなりの惟みるに、文化距でいよく談話するを得るなど、通信機關の發達 を齎らす。郵便の發達せる今日、往時の飛脚通信を によつて察することを得るや。 間の短縮と經費の輕減との上に、最も著しき効果を及ぼすものなり。而して通信機關の發達は、時 の要求を充たすに與つて大に力あるものなり。 而して通信機關の發達とそ文化の進步上如 切に時間の上に經濟的使用の必要を感する

超越 せる靈妙なる精神を有すればなり。 萬物に長たる所以は何ぞのこれ人は禽獣に 第五學年 忠

神の修養に留意し、自己の努力によりて其故に生命を保全し、健康を維持する外、 更に精

に於ける、此 神修養に努力すべきなりの され ば吾人は須ら一良書の選擇に注意して、精 其の影響する所大なりといふべし。

成功は

第五學年 非常に美し に美しい材木を、友に示し 學年 藤田小太郎 小の人に存す

> 一般表である」と、述べた話は、性に、成功の を美しい者は無い。偉大な成功を求める者には、 の一般大な地盤が無ければならぬ。如何に成功を望ん でも、其れに足る準備が無ければ、所謂、砂上の でも、其れに足る準備が無ければ、所謂、砂上の でも、其れに足る準備が無ければ、所謂、砂上の に撓まず、馬首を立て直し立て直し進む人こそ、 があるからである。 得た結果である」と、述べた話は、慥に、成功の寒暑に侵され、幾度か死生の間を彷徨して、贏ちに芽生にて、雨に叩かれ、風に惱され、或ひは、 に芽生にて、雨にて、此の材木の斯 一叩かれ、風に惱され n, it, 或ひは、

達せられた時に、始めて人間さしての價 第五學年

出來るのである。海拔何千尺さいふ高山の頂に、値が定り、それと同時に其の偉大さを知ることが 境を彷ひ、非常な困難を征服せねばならない。よ を渡り、大森林の中を彷徨する等、幾度か生死の ことを謳歌したい。 ふ者か多いのは何故であらう。吾人は此に於いてつて苦痛の爲に、自己そのものを征服されて仕舞めねばならない。然るに其の事實を知りながら却 り以上の愉快を味ふ為には、 **| 数喜の聲を擧げ得るまでには、險阪を攀ち、** 隱忍努力。それは苦痛を征服する唯一の武器たる より以上の苦痛を甞 溪谷

3 養

「良書を讃んでその主意を心に銘し、之を實行し第五學年 岸 番 熊

云ふ者があれど、そは年面のみを見てゐるもので 養となるのてある。 やうさするから、讀書が修養として役立つ」と 小なる知識も、 ある。書を讀んで知識を頭に蓄へることが日に修 大きし、 あらゆる知識が、その人の人格を 圓滿にするのである。 讀書から得た大いなる知識も

英 文 蘧

A LETTER TO A FRIEND OF MINE IN AMERICA

Heki, Otsu-gun, Yamaguchi-ken, October 18, 1925

Dear Mr. Shirai,,

much, as the students are very good in their conduct take the entrance examination of a high school next above my follow students. have not yet been able to stand head and shoulder above my fellow students. Anyhow, I am going to think that I have improved pretty well in my studare you getting along in these days? Time flies away es, especially in English and mathematics, though I for four years by next March. swiftly, does is not? It is five years since I saw you I shall have been studying in the middle school I am happy to say that I like this school very The cool and pleasant season has come. I flatter myself to

> れ即ち。 を人格者たらしめたのである。 汚行をも容さない。 光が閃めいて、それが此の人に、ねた、豊な、平和な深奥な知識のあの神の様な老學者を見るに、そ 讀書から得た知識が、 聖者を見るに、その額には積み重 (た知識が、おのづと、その人種學鴻儒に惡人はゐない。こ 少しの悪意も、

return home in splendour. Our friend Mr. Sato in that I have not you here to talk the the same place as of old, but it makes me sad to think Hagi unites me in wishing you all possible health forward to the time when you will be successful hear from you from time to time, tree full of reminiscences of the past are growing in wood at the back of my house, ning prizes in the athletic meeting of autamn : and that we spent a long day of spring in the green field: pleasant than to look back on our happy we are separated from each other, I am anxious to we had a pleasant time in gathering chestnuts in the a river near by : we vied with each other in winon a fine day of May, I went fishing with you to ary school course often brings to my mind those in commemoration of our completion of the element school days. The photograph taken together with you and very attentive to their studies, but nothing is more happy memories associated with you. I am always looking The very chestnut past with. I remember primary

48

Yours very truly, K. Onaga.

COMMON SENSE

4:1 Goro Nagadomi

He is called a man of common sense who, not only understands things common in the world, but observes and judges impartially anything which he comes across and always takes proper measures in dealing with it.

On the contrary, a man who has no common sense is eccentric and headstrong, and sometimes in danger of running to an extreme.

If you are void of common sense, you, as a statesman, will not be able to make the nation happy, always failing to act as the occasion may require in diplomacy, as a business man, you will miss a good opportunity and in consequence sustain a great loss, as a scholar, you will maintain a useless and impracticable argument or advance a strange and grotesque

theory; as military man, you will behave yourself so imprudently as to affect your reputation; and in your daily life, you will often throw yourself into a strife with others, or destroy the good manners and customs of the society in which you live. In view of the above reasons, I am sure you are convinced that common sense is more useful rather than any partial knowledge in your life, excepting in some professions which require a special ability.

It is no wonder that the English should pay much attention to the cultivation of sound common sense. When we reflect upon the fast that England owes much her prosperity to the very character peculiar to her, we feel most keenly the necessity of developing the common sense of our nation upon which the perfection of the constitutional government as well as the progress of industry of this country.

Thre are some people who are wanting in common senso out of their own ignorance, but, as a matter of fact, men of hight education often lack it

and are narrowminded in spite of their special faculties. It is true that a learned man or a man who excels in some special arts has much knowledge and faculties in their own line. But he has not always more wisdom and experiences in the direction of things out of their beat than other people. We ought to bear in mind that, if there is one thing which should be cultivated by those who would succeed in life, it is sommon sense.

THE GREAT HAGI

4:2 Hajime Wakimoto.

Hagi is a pretty large town on the north coat of Nagato province with a population of over 30,000. In population, it may be classed next to Ube city, Shimonoseki standing first, but, from a commercial point of view, it takes the fourth or fifth place among the cities in Yamaguchi prefecture. Needless to say, it was the old castle-town of the former Moji clan, and has been the centre of administration in Abu-gun

49

since the biginning of the Meiji era. The manners and customs of the citizens are exceedingly cordial and obliging and are not like those of the people in a newly-established city or a mere commercial town.

present Mine. In the near future. of railway traffic in April this year, it has become possible in three hours to reach Asa, a city on the lishing various kinds of factories. Since the opening In the suburbs there are many good places for estabhas many important elements which are necessary for a commercial town as well. Though high waves to educate young people, as it Higashi-hagi station which is the terminus Sanyo main line. Next November trains will run to to enter the harbour, it will probably be made a good on the Japan Sea otten make it difficult for ships histrical interest, but it can not be denied that it sea-port, if harbour works Hagi has been regarded as a good place in which are properly is rich in the railwy conducted. places of

extended to Masuda of the Sanin line. On the completion of the railway, the facilities of communication with other places of this country will greatly be improved and the products of the city such as fish, oranges, bamboo wares, and paper umbrellas will soon be able to extend the market.

Such being the case, it is not too much to say that Hagi has a bright future before her as a commercial city. Then, what ought we to do in future, if we really want to make our city gfeat? A city is not of value not for its size, but for its citizens, cooperative spirit and constant activity. The responsibility for building up the Great Hagi entirely rests upon our shoulders, so it is necessary that we should try to do anything in cooporation for the sake of the city, refraining from acting on a selfish motive.

A VISIT TO THE ALMA MATER

By Chuji Muraki, 5:B.

My dear Alma Mater where I spent the early part

of my school-days stands at the foot of the hill of Jonokoshi, which towers up about one mile east of Matsumoto. The school-building is neither fine nor imposing to attract any special attention, but how sweet to my memory are the scenes I played my active part on with other urchins like myself!

One sunny afternoon of August this year I had an occasion to visit the place. Everything there greeted me with a smile. While I was loitering about the grounds, I heard an organ from within playing sweet music to which accompaniment we used to sing just five years ago. At this I was naturally put in mind of old friends of mine.

The pine-trees which were about five feet long when I left the school have now grown up large enough to shelter me from the sultry rays with their green leaves. I did not omit to peep into the class-room where we once listened to the story of a hare and a tortoise. There I found many desks at which we were once seated and which we have now outgrown them, and

lovely finger-marks and innocent scrabbles on the walls. The sight recalled to my mind the reminiscences of my childhood like a revolving lautern.

Then I left there and took a stroll in the garden. White, red, yellow, purple, and various beautiful flowres were at their beast. Can there not be any episode of our naughty days related about the garden, too? And then I inquired after the chatty old school servant and gossipped with him for some time. He gave me some fruit which he took from the plantation we used to weed. I appreciated his usual kindness more than the sweet taste of his gift.

After a while I bade him farswell and bent my step homewards, still runninating on the happy memories of those days spent there in my childhood.

A CRY FOR ECONOMIC CONSCIOUSNESS

By Tadao Yamamoto, 5: C

Whenever we hear or read of the great number of the unemployed, we can not but consider the economic

itable for Japan, much regretted to say, to come to is the urgent necessity of the moment to diffuse ecpolicy and the strenuous exertion of the people toupon, but the establishment of a parmanent economic country, which has few available resources to the economic collapse. There is no choice for our onomic idea among our nation and curb the evil sent situation were to last long, self-indulgence of our nation. It is natural that we economic crisis, owing to the enormous loss of our country has encountered an unpreced ented manner of extravagance. should keenly feel it necessary to find out some wealth in the quake world of today to be at a deadlosk. vards thrift and industry. method of stabilizing our national life, disaster and the unceasing On the other hand, it it would It soms that If the pre-

All civilized nations in the world have the strong sense of national economy. Americans, with all their enormous wealth gained through the great European

war, have never been degenerated owing to the material satisfaction. Even the defeated Germans have worked out marvelously rapid revival by their national co-operative industry.

quality. the activity caused by the war should be followed by money in the fund of their future expansion instead of activity in exporting crude articles of the bad sighted people and the indications of the low standard vous result. made goods unreasonably, which may produce agrieof economic sense have expressed themselves in various importing luxuries, dazzled by the good name of culthe present unexampled calamity, they would not stop an inactivity as a reaction. Moreover, in spite of condition, though it was the foregone conclusion that reflecting as not to consider the after-war economic tural life. As for the Japanese, they were so shallow and un-Our emigrants can not invest their On the whole, the Japanese are a short-For instance, most people contempt home-Our manufacturers will take advantage earned

> of renitting it home. These are all due to the blindness to their permanent development.

The armed coeffict of today, when the weapons are so destructive and the issue is so horrible, can hardly be realized. The international competition in the future will be carried on chiefly, nay, entirely in economy, and any people incapable of economic independence will be a subjugated nation forever. It is not too much to say that the development of national power depends more on economy than on armaments.

It is one of the most salient features of the present age that the whites are threatening to take and reign over what small space we can expand in. we must be aware of their everwhelming influences. The imission of promoting and protesting the honour and prestige of the yellow race rest solely upon our shoulders. Economic war is continuous and unceasing throughout the whole world. We should come to our economic senses and courageously provide against the

forthcoming "War in Peace".

OF HEALTH

By Kotaro Fujita, 5: A.

working all day long. the working class will merrily whistle away their time, as rich food for wealthy who are poor in health. coarse, but several thousand times as delicious for them ables which they take after their day's work must be and feeble, your spirits will sink more and more and the at those stout and robust labourers and farmers. The cata result that you will have to lead wearisome life, keepdiet which should taste sweet must be unpalatable, with ties, attended on by your servants. But if you are weak fine villas wherever you like and take all sorts of dainriches make you happy. you were lacking in good health your profound knowedge would be of no avail to society, nor could your to fall ill. However learned or rich you may be, if There is nothing more unfortunate in our life ithan indoors from day to day. The farmer are rich but are lack-Indeed, you may build many On the contrary, look

ing in good health, while the latter are strong butm ust work hard for food from morning till evening. It must be hard for them both. But if I were made to choose either of them I would take the latter without hesitation.

admiration from the world. over a month I wonder what would have become of me. ing idle in the house. If this condition had continued thought that I was rether lucky, for I had to do no work various kinds of wounderful things that may command health for money; the richest man would part with his while in bed, but two days after I beganto be vexed by ach trouble and kept in bed for several days. energy which consists in physical health that we can do to make ourselves strong first of all, for it is by our tinently the necessity of good health. So we must try money for health." ing passages, "The poorset man would not part with wearisomeness. At last I could no longer stand remain-I remember that I have reab in some book the follow-I am always reminded of the time when I had a stom-I think this remark explains per-At first I



雁のおさづれ

左の一編は第十九回卒業生吉田寛氏の岩田學校長に宛 たの一編は第十九回卒業生吉田寛氏の岩田學校長に宛 が出来る。 が出来る。

エール大學より

的 校 吉 田 寬

た。時々の來信や日本新聞により、日にくし變りはありませんか、お何ひを致します。御地も既に夏休みがすんで、第二學期が始つた頃と存じます。當地にても各大學は今週中に開校致します。御地も既此、私の今度ゆくエール大學は、十月一日からはとまります。如此を受ける。

白人頭 かっ 鐵道が 如何なる變化をしつゝ ついあ の練習にもなるだらうと思ひます。なるべく此處本人が少いから此處の方がハーバードより、英語 専門に入る事にしました。それで今度は有名なるつたものは得られませんでした。今年度から愈々 50 程違つてゐるか、 出した新しい萩と現實に動きつゝある萩が たやうにさへ感じられます。私の で、何だか之まで寝てるた就そのもの に関する事をやつてみたいと思つてをります。日Politicsと漠然申しておきます。主として國際問題 に今後二ヶ年間停りたいと存じます。 エール大學の大學院に入る事にしました。専攻は はさすが 在米正に一ヶ年でありますが、何にもまごまたつてゐるか、數年して歸つて比較してみませ 更に又田中將軍の出馬の事まで聞きましたの 如何なる影響をもち來すことであり 出來たと聞きましたが、 にゑがき出されます。 る有様を遙に想像してをります。 米國人が自慢する程あつて、 あるだらうか 永年の問題であ 果して如何に と言ふ事 1-勝手に作り 萬事非常 工一 殊に萩が ル大學 き 如何 せら つた 利

よく設備ができてをります。エール、ユニヴァシなるやうであります。日本人はごく少数であります。とにかく今度は恐らく私の最後の大學教育と思ひますから、今度こそ全力を舉げて何物かをつめたであります。そにして、今度こそ全力を舉げて何物かをつめるとであります。時によろしく、殊に唯今は八月以來天幕生活態が特によろしく、殊に唯今は八月以來天幕生活態が特によろしく、殊に唯今は八月以來天幕生活を心社會に立つのを見ると、私にも何か出來ないをのかと思ふ事もありますが、平生は無邪氣な學生の仲間で騒ぎます。別に腕がなるわけでもなく、といかくもう二ヶ年はすきな研究に日を送りませんでせうか、尚私の今後一ヶ年間の P.O.BOX. はたむの通りであります。或は先生御渡米ではありませんでせうか、尚私の今後一ヶ年間の P.O.BOX. はたこの通りであります。敬具

九月二十二日

Yale Station 1409 New Haven, Coun. U,S,A,

岩田先生

山口高商より

同校阿部悌甫

の歴史は何に り年だこ焦まんどする士の搖籃所として、最上の他實業界に驥足を延ばさんとするもの、又經濟學 置であ 只に支那方面に牛耳を取らんとする者は勿論、 各々自己の希望の道に猛進される事と思ひます。う、そして或は大學に、或は高校に、將高商に、 諸君 重鎮を以て目されついあるのであります。されば 有為の士を輩出せしは勿論、國內經濟界に於ても、 は雑誌「東亞經濟研究」の發行と、支那貿易科の設る所以であります。就中其事業として顯著なもの 抑我校は其位置支那に接近せる丈でなく、 の所謂受験生活なるものが、 りまして、既に東亞經濟の檜舞臺に、 山錦に彩られて、日本海の怒濤漸く に我校が東亞經濟界の木鐸を以て任ずれも東亞を中心として織りなされたも 開始されるでせ 狂ふ時 幾多

含があつて、毎年一年生は半强制的に入寮させます。入寮にも一利一害ありますが、自治的、共同的精神の涵養として、一年位寄宿生活を味はれる的精神の涵養として、一年位寄宿生活を味はれるである位に考へる人があつたら、其れは大なる誤りです。相當に勉强する決心がないと、三年の所を五六年かゝるのは何でもないです。 大年かゝるのは何でもないです。 R 検の位置は少 を信じます。 せう。他校同様我校にも寄宿で通でき、又其山紫水明研學田舎の如〈思はれますが、今

「英文の解釋」で構文及單語の知識を付ける事、事を希望します。準備をしては教科書の総復習と、も、是非必要なものですかから、一入努力せられん 文でなく、入學後も本を讀むにも、又課目として 英語、之は只に試驗課目として重要視されてゐる 揮さす様に傾きつゝあるもので、今では此人爲淘水に入學試驗ですが、之は段々各人の實力を發 全に近いものでせう。

> 書取りしたら結構でせう、此書取は及落の思聞記し、應用問題に可成多く當る事、次に書い、の所を讀んで紹介の所を語んで、次に作文は教科書の思いて解釋の力を得て、次に作文は教科書の思いて解釋の力を得て、次に作文は教科書の思い

書取りしたら紀れて、やばり相當必要ですし、又数學、之は中に入て、やばり相當必要ですし、又就驗に於ても、一番及落の溝を大きくしますからは職に於ても、一番及落の溝を大きくしますからを鍛べて能きる丈澤山の問題に當つて、自己の力を鍛べて能きる丈澤山の問題に當つて、自己の力を鍛べて能きる大澤山の問題に當つて、自己の力を鍛べて能きる大澤山の問題に當つて、自己の力を鍛り、 に時の基かり要の場合又

は、 です。國文は此處の問題は、毎年奇妙な奴ですが、 です。國文は此處の問題は、毎年奇妙な奴ですが、 です。國文は此處の問題は、毎年奇妙な奴ですが、 を隅から隅迄熟讀し、現代文は新聞の社説位讀ん で於いたら、結構でせう。準備中に新聞も讀まれ でかいたら、結構でせう。準備中に新聞も讀まれ ないでは、到底駄目です。殊に今年の試験の演説 國漢 漢文は土

益です。但し暇があり過ぎてゐるものは別ですが。 要するに現今では實力のあるものが、勝つのです から、恐れる必要ないです。 最後に諸君の努力の結果が龜山下の綠蔭に中原 から、恐れる必要ないです。

0 鹿を取ら n h 事を新 つて擱筆します。

臺灣高商 より

同

桃や薔薇 空が 4. もあります。天井を匐ふやで微かな音を立て、風が縫を微かな音を立て、風が縫がないないの際も残りが夕間に深かない。 国が縫ひ歩き、紅い夾竹 間に浮ぶ頃は、常夏の島 に浮ぶ頃は、常夏の島

本校の特徴は「臺灣にある」とし、 本校の特徴は「臺灣にある」とし、 本校の特徴は「臺灣にある」とし、 ないものです。鳳翼で飾つた我徽章はよくこの間有洋經濟」は従つて他校に於ては見ることの出來得ない性質の學校です。當てお目にかけた「南支支ない樣です。が、本校は本島を離れては存立し 從つてモットーとして ますの √何處に置いても差 かけて置 いても差

殊に後者は本島に學ぶ者の特に留意すべきことであつて、この意氣がなければ、本島に學ぶのは危險です。絶對に危險です。前途には只墮落あるのみです、大部分の人が言ひます、臺灣に居ると頭が鈍くなると、さうです、内地の學生に比べると頭の好くないのが居ます。がそれは元來頭の惡い者が移住侵入し、又暑さに畏縮して、といふよりは、暑さに罪を著せて勉强しないのです。この意氣さへあれば大丈夫です。官報を繰つて見給へ。 版です。絶對に危險です。前 新もて熱を制す 然に後者は本島に學ぶ者の特 然は本島に學ぶ者の特 がなければ

本島に於て

は限りの意 で脳本 に於て何人博士が製造されて居るか。 に於て何人博士が製造されて居るか。 本島の各學校は薄馬鹿の集が退化するとか、本島の各學校は薄馬鹿の集が退化するとか、本島の各學校は薄馬鹿の集 り、意

しい。來て、所謂灣化の例を示して戴き度くありと思はれる方は、絕對に本島にに來ない方がよう又この意氣を持つことの不可能な、又は不可能だは有りません。 t ho

本に入學試験のことですが、英語に優れた方は 合格請合。國漢數學は殆んご補助學課です。とい って全然勉强しなくては困りますがね。英語は新 を、當然商大流の出題法に似て來ます。私が受験 した時は過渡期でしたからあんな問題でしたが、 以後はズッと變ると思ひます。我々新一年生が現 在學んでゐる學課の種類內容が、昨年一年生の學 んでゐたものとウンと變つてゐるのを見ると、英

語は勿論、前に呑氣に言つた國漢數學もヒョするとヒョッとです。マア下らぬ憶測を逞しるより、誰もよく云ふ事ですが、教科書を完合れから、折角本島を目指し、又首尾よく太人學されても、本校卒業後の就職口如何が分くては入學が盲目的であつて無駄でせう。本校卒業生は殆んご、時に一人二人の例外本校卒業生は殆んご、時に一人二人の例外 誰もよく云ふ事ですが、教科書を、前に呑氣に言つた國漢數學もと 叉首尾よく本校 教科書を完全 測を逞しうす 分ら 3 "

す。かませんの りませんのこの りますが、全部 但し就職は本島内又は南支南洋方面 點に於ては他の學校卒業生程心配は要全部といつてもよい程就職難はありま生は殆んざ、時に一人二人の例外はあ

が、萩木 第二師範學校開校の企もあり將來有望だと思ひまが十七年には臺灣大學に農醫科が設けられ師範は地高農、醫專、師範につき、詳しくは存じません 地高農、醫專、師範につき、詳しくは存じません外に御質問あれば本校內宛御手紙下さい。尚當て御入學なさる事を、双手を擧げて歡迎致します。 、萩中出は私一人です。諸君が本校を御理解あつ在、本籍を萩及び椿東に有する人が二人居ます

屋高商より

商業大都市にあり、創立以來日尚殘しと雖も、東は商大、西は神戸高商に對抗し、勤勉を以て全國的に名を 賣つてゐます。朝に 夕に、金の鯱を 拜し、熱田の森を脊にし、遙か伊勢の鈴ケ嶺の英氣を吸ひ、頭には燦たるマーキキュリーを載き、意製高く、長年教育に從事され、日吉の丸に帆をあり、將に出帆せんとする榮ある吾等の首途の日をげ、將に出帆せんとする榮ある吾等の首途の日をげ、將に出帆せんとする榮ある吾等の首途の日をである。 す。職業的修學よりも、むしろ人格の巻ません。之は創立以來不文 律として存 し本校は他校と趣を異にし、 本紙上を以 何より 幸福と威せられ、本校の。
出帆せんとす を飲み、又は頭髪を長くする事は あり、創立以來日尚殘しと雖も、東りうれしく感じます。本校は中京のてなつかしい皆樣に接する事の出來

> 抜にを置 處の して居 に」とは正に本校唯一の稱でせう。
> で居ります。卒業後商大に入學する割合も
> 、一年間の强制的寮生活も將に理由を此處

かかっつ ますの ヒャ リングも大いに練習す まだ三ヶ月もあ べき價値が んとする方が から、 あり

たのれ ですから、な 返事します 方は、御 にな 一報下 ませ がう さが 詳 5 何時に知を知

大阪外語 より

森

事と存候。本校は高商と異る所なく、唯加ふるに事と存候。本校は高商と異る所なく、唯加ふるに事門語、國語、地理、歷史、商業、經濟、法律、体操、武道、修身、言語學の十一課目に尚社會學に從事致居候。尚教員にも多く相成り候。就中支に從事致居候。尚教員にも多く相成り候。就中支に從事致居候。尚教員にも多く相成り候。就中支きつゝあり。入學試験につきては除り申す事も無きつゝあり。入學試験につきては除り申す事も無きつゝあり。入學試験につきては除り申す事も無きのゝあり。入學試験につきては除り申す事も無きのゝあり。入學試験につきては除り申す事も無きのゝ。本校は高商と異る所なく、唯加ふるに 日尚 啓諸 淺 き為 益々御壯健の段奉賀候、 8) , 内容に就 4 ては おて本校は創立

> は何時た 新君 れ度くしからば詳しく通知致すべく候。又規則座候へば、入學希望の方は御遠慮なく御尋ね下とを切に希望致置候。之位にては甚だ不充分に すべく、其の方便として我が健なる我萩中諸君よ、剛勇をは海外に發展するにあらざれ 今後益々御勉强傍ら らざれ 我が外語に べく候。 運動 にも に人學されに南 に道な V 下 又規則書 さる様 に活 h

東京高等商 4

校

華か 血れ、商氣、船 、船 で あるくて脱ぎな多くて脱ぎ 盛 鐵 校 て脱落放 縱 は隨 に散

り落さ 所。 1 50 甘言に乗つて入 n は寒々で原級に

50

度いと思ふ。 情を審かにし、 の は であるといふ真然 こ校へればどが飛れど 完全な指導 を審かにし、然る後、進むか否かを決めていれたいといふ無鐵砲さから。先輩が自分達の學之をが多いのを私は知つてゐる。といつて學心介することを止めるといふのではない。又心全な指導が出來るといふのでもない。私は一人と先輩との間に、人間の一生を扱ってゐる。といって學校を告訴しい。與此述があって、博く學校の表情導が出來るといふのでもない。私は一人との表情等が出來るといふのでもない。私は一人との表情等が出來るといるのでもない。私は一人とない。」 生許 4 少年日 がいつ 然る後、進むか否かを決めて貰ひ 然る後、進むか否のではない。又私に 中心さから。先輩が自分達の學校に 上にりな誘ひに喜び乍ら、上級學 上にりな誘ひに喜び乍ら、上級學 上めろといふのではない。又私に 来るといふのではない。又私に かる。といつて學校を といるのではない。又私に ない連結があつて、博く學校の内

多にれ地の商 13 い吾々 4學 世間 は呼んだは昔 h ましめ 0 事は で越ら で越城となし。(又事實さうかも知事は娑婆といふ。その現代的生活も甚しい。五十年の籠城生活は夥しめた。向上はない。唯徒な荒廢しめた。向上はない。唯徒な荒廢を載せる人は私は古の道徳的その中に も基

れの私は敢てケチをつけてゐるのではない。私は船界を望む若人よ。考慮と決心とを以て來老婆を見る氣がする。 げた 00 人々が 50

記

木君 2 1

宅地 を 地 変 戦 町 が いの高等學校には、まりないいはり返つて貸ねてるくせに、さら――まれ町の半分にも足りない小さい町です。と言った僕の二人つきりです。 地をして、ぞくと、純住宅が建てられてるまで上野から五十分。 八車で上野から五十分。 大を味はうでせう。曠野、櫟林、朝 20

大學者その他ありさあらゆる大の字のまつばじめの中心であるさころの大帝都に接續してる點にあの中心であるさころの大帝都に接續してる點にある。一かるが故に未來に於ける大政治家、大藝術家 るど、それ そこで浦 1 まれなければならない は、一方偉大で、崇嚴で、神秘的な大和といふ土地のいゝ所以を我田引水す んであるー なんて辯

論部の大家連はわめいてゐます。 學校は本年第一期の卒業生を出した位の新設校ですから、下らない校風や、傳統のくさびに縛られることのないのは、生徒の個性にとつてむしろっきの弱い學校ですから、多少なりこもスポオッの心得ある人は、世にも花々しい選手にすぐなれます。入學志願者は高校中でも多い方らしいですが、秀才はあんまりゐさうもないですね。それから學校は他と較べて隨分八釜しい方だと専らの噂です。そのはずで校長さんは以前例の五高の校長です。そのはずで校長さんは以前例の五高の校長です。

五持

兼か ね備は 50 しかし校長仲間では、大 古株の方で名望手

松江高校より

是非 が何に か をご頼まれた為、 越 の至 5 のかち 知

れないが、敢へて禿筆を弄する次第である。 近く千鳥城の、蒼翠中に聳ゆるあり、西方本邦十二勝の一に數へられる宍道湖の清瀾に臨み、遙東方に出雲富士の巍然として雲間に聳んたるを眺むるの地、これ水郷松江である。詩の都!! 水の都!! とは來訪者の誰れもが懐く通有觀である。 である。我校は新設校の一で、今年漸く第二回のである。我校は新設校の一で、今年漸く第二回の本業生を送つたにすぎない。だから學校としての整度は可成り貧弱である、がそれだけ我々の希望を表す。責任もあるわけである。新しいだけに氣

語にしろ、末たフを部出席すれば、五點かるととれこと大變な事になる。高等學校とて中るるととれこと大變な事になる。高等學校とて中る。 強智でもして行かず、今日はやつてきません何か云はうものなら、立所にマイナス三點位にはなる。が併し先生生徒間には、非常な親しみがあって、先生のお宅へはごした、訪問に出かけ、時には口角泡を飛ばすこともある。此の學校は出席には口角泡を飛ばすこともある。此の學校は出席には「大人」 多い。 して よくても出席 へない中にずんら、進んで行く、うかくしていしろ、未だアー、ベー、ッエー等もろくく、銀へられる。又進度も可成り早い、例へば獨逸 ケの へられる。又進度も可成り早い、例へば獨逸年の星霜を經ておることゝて設備は全く完備いゝことは又格別である。新しいとは云へ早 E 0 である。又校則として成績の方ではが常ならざるものは、それだけ點數 ることがあ

察は本校よりも一段(二三間)位高く、真に寮らしい感じがする。凡てで六寮、百二十室で、娛樂室、讀書室、等設備は全く備つておる。寮の生活室、讀書室、等設備は全く備つておる。寮の生活室、讀書室、等設備は全く備つておる。寮の生活を許可されることになつた。これは特に注意すべきことである。在校中の萩中出身は僅四人である。隣縣にも關はらずほんとに少い、來年の春は も割合安いは 。合 ずです、お互に水郷で 水校を特に希望します○ に水郷 いにやは りま費

南高 校より

同 校

むのの の地、此處に白色あざやかに屹立する宏壯な現點在する岡本の里、六甲山麓古色漂ふ二樂莊下東海道線を東へ住吉驛を過ぎて、赤き靑き洋舘東

候我等 こしに変換、 である は運動競 熔に 12 かす夏の日の下、六甲下しなびく春の朝、満月冴ゆるなびく春の朝、満月冴ゆる 技 に熱中するのであります。 學び含 であ し唸る巖冬の ます、 0

かく自然に悪れた我等は、又全てに悪まれて居ます。有名なる丸山氏を校長とし、理事長以下教護話氏は皆熱心に、懇篤に、我校設立の精神に基いて、生徒の指導に任じて居ます。 で、生徒の指導に任じて居ます。 で、生徒の指導に任じて居ます。 で、生徒の指導に任じて居ます。 で、本だ三星霜を出ません。従つて先輩を有せず、確たる校園の無いのを遺憾に思ひ、全校擧つて他校に優れたる甲南校風の設立に努力して居ます、吾校設立の精神を申しますなら、ゼントルマンスピリット、これが吾々が理想として居る所であります。それ故に吾が吾々が理想として居る所であります。それ故に吾が吾々が理想として居る所であります。それ故に吾が吾々が理想として居る所であります。それ故に吾が後創立の意思は入學難緩和の為でなくて、より高尚な人物の養成の為であります。 んとするものであります。上本校の一端を誌して、諸君何な人物の養成の為でありまなが理想として居る所でありま

め以高 んとす ますの語が 君の参考ともなら

> 國學院大學 9

します。普通雑誌等で皆様の御存じの事だらうと思はれる事は省きまして、極めて簡單に申します。 先づ入學試驗ですが、勿論國漢、歴史が大事でありますが、全時に又豫科志願者は英語を非常に重要視せられて居ます。他の學校の様に、數學があります。學校は市内の雜踏の巷ではなくて、市外でます。學校は市内の雜踏の巷ではなくて、市外でます。學校は市内の雜踏の巷ではなくて、市外でます。學校は市内の雜踏の巷ではなくて、市外ですがら極めて閑靜な所でありますが、しかも近來著しく勃興しつゝある澁谷町にありますから、便 します。が明ませ 天高肥馬 存じます。へ ひ、 ・少しく我が國學完 に ・少しく我が國學完 に 諸君には 雑誌等で皆様の御存じの恵ます。今回雑誌部の方の御ます。今回雑誌部の方の御ます。 事だらうさの御依頼のあ

校 内では國史學會、日の方はよくあります。 國、 文學、 會、 神道青年 食、

官 吏練習 所

日く何々と種々の會が始終ありまして、學界の權 成者、若しくは名士の講演等も容易に聞けます。 東他短歌、創作、音樂等趣味の會も尠からずあり ます。源氏物語全講會、萬葉集二十回講座等は一 の言、大体此位に止めて置きますが、若し諸君の中 で來年御志望の方で御 不 審の 所がこざ いました の、私共雨人何れへでも御通知下さらば、よろこ ので辞しく御答へ致します。尚山口縣人で組織してある豊榮會と言ふ會がありまして、之には寄宿 者の設備もありますから、始めて御上京の方で、 別段御親戚もなく、又は御入學後宿所にお困りの 方は、萬事御相談に預り、出來得るだけの御世話 は致します。萩中出身は私共二人きりで、誠に寂 0

廣島高工より

同校谷川清

ス學後日尚淺い事ですから、我校の內情は充分 外りませんが、簡單に御紹介致します。 我校は機械、電氣、應用化學の三科に分れて居 我校は機械、電氣、應用化學の三科に分れて居 のませんが、簡單に御紹介致します。

件させねばなりません。各科とも授業時間は一週に三十九時間ですが、四十數時間にはなりますから、又ペンを取る事のみでなく、ペンマーを振りら、又ペンを取る事のみでなく、ペンマーを振りまする事が多いですから、それに堪へ得る身体強勢學(代數、幾何、書法等ですが、特に重要視されるのは、大です。又入學後數學をやらの日は一日もなく、大です。又入學後數學をやらの日は一日もなく、大です。又入學後數學をやらの日は一日もなく、大大大大です。又入學後數學をやらの日は一日もなく、大大大大です。大學、強問は出ず、時間は充分ありますから、其場逃れの試驗勉强では駄目です。物理化學は教科書と参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、而して後高書に参考書を参照して、全体をやり、面して後高書に参考書を参照しておく事が肝要です。何れの科目

切です。

前に申しました樣に、我校では授業時間數が可成多い上に、大抵の學科は月に一日位試驗をやりますから、入學後多少の苦痛を感じますが、豫め其の覺悟はなければなりせん。趣味を工業に持ち乍ら自分は身体が弱い為、高工の課程に堪へ得ないだらうとの懸念される方があるかも知れませんが、決して途中にたをれる事はありません。鬼角高工は苦しいと誤解されぬ樣………。

龍大より

內 校 波多野義貫

弦に本誌を通じて、懐しい母校の諸君に見た、 は上むに止まれぬ思ひが迸り、ペンをとつた次第 語る前に鋭い反省が繰返へされた事は事實です。 たことを、喜ぶと同時に一つの責任を感じ、諸君に たことを、喜ぶと同時に一つの責任を感じ、諸君に だす。

先づ頭に浮ぶのは、今春四年の諸君が修學旅行で京都に來られ、驛頭の一旅館を黄服で埋め、在京同窓生を共に、二階も崩れんばかりに高らかに京同窓生を共に、二階も崩れんばかりに高らかにの氣慨と云はうか、質質義勇の精神は確かに諸君の一人々々に、溢つてゐた。私は諸君の前に、御五に我々は永くこの校歌の精神を以て進みたいを新つた――。ことも覺にてゐる。

と歌はれた三百年に近き歴史を有する日本最古の銀杏の陰に聳り立つ、嗚呼三寳の聖學府………風雲叱咤三世紀、威嚴は高し史長し

學府、それは洛南の一角に位し、四年前に大學合に依り、龍谷の名を冠し、今や一文科大學として世に依り、龍谷の名を冠し、今や一文科大學として世に依り、龍谷の名を冠し、今や一文科大學として世の技術の下で見らず古雅なる鐵棚、現在の私達は此處で、温い宗教的雰圍氣の裡に感激を多分をたいを思ふことが屢々あります。諸先生ののは、現在の諸君には或ひは理解され難いかもしれない、主觀的の立場だから。然し鬼に角かゝる。どを信じます。本大學文學部では、佛教學、あことを信じます。本大學文學部では、佛教學、なことを信じます。本大學文學部では、佛教學、なことを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。本大學文學部では、佛教學、なることを信じます。 る。そこで、佛教を研究せ、就中佛教研究には本學は最 真宗學、佛教史、 學、西洋文學の一を専攻することうなつてある。 宗教學及宗教史、 んとする人は是非御人 支那學、心

學術を研究せんとする人*リーのてゐます。それから卒業生は失々高等教員、中のてゐます。それから卒業生は失々高等教員、中のてゐます。それから卒業生は失々高等教員、中のてゐます。それから卒業生は失々高等教員、中 言も、家、 來の、て中、 い般、

る。教授も他の高校に劣らぬいゝ人が澤山あり、温味があつて親切である。三年間通して外國語が一番多いゝ、一週英語が十時間、獨乙語或ひは佛蘭西語が五時間ですから英語はざれだけやつて置でよのは三年制の専門學校で入學資格は中學卒業程度です。こゝでは主に佛教一般と真宗學を深く程度です。こゝでは主に佛教一般と真宗學を深く平業後文學部の或る學部に入學が出來る事になり幸業後文學部の或る學部に入學が出來る事になり。 で私の望む所では、 したの能大一覧」を御讀み下さったら判るでせう。 る。教授も他の高校に劣らぬいゝ人が澤山あり、高等學校合に依つて設立され、中學四年から入れなければならぬ。我が大學豫科は三年制で、勿論 入るには本大學豫科、或ひは高等學校高等科を經です。右は主に大學部のことを述べたが、それにに文科に志す人は、英語や國漢を忽にしては駄目 競争率は割に緩和 入學試驗準備と云ふよりも、 に理解し、高等教育の機會に既習の智識 されてるますの

る事が大切でせう。矢鱈にあせる事はありません。 いた點を簡單に書いておきませう。 いた點を簡單に書いておきませる事はありません。 大切でせう。矢鱈にあせる事はありません。

い一語 、数學が仲々むづかしいとか、必要事項を徹底、数學が仲々むづかしいとか、必要事項を徹底では、 英語は構造が判れば自然出來る樣なものらし、 英語は構造が判れば自然出來る樣なものらしそのまゝが出たそうです。 1-

が出たそうです。 的に理解してたくがいゝ。計算問題 を基は近時一般) 計算問題は毎年きまつ

虚なく御申越し下さい。尚御希望の方は御知らせ 増加してゐます。間もなく一千の學徒を數ふるに 至ることゝ思ひます。目下鐵筋コンクリート三階 全が工事中で少々賑かです。明年真面目なる諸君 の御入學を望みます。目下鐵筋コンクリート三階

宗教大學よ

學してゐます。本學は來年度より大學令による大學に昇格するので、一般俗人の入學を許可する事になってゐますが、果して幾人の俗人が入學する人が今少し宗教方面に覺醒されて、共に研精其の人が今少し宗教方面に覺醒されて、共に研精其の人が今少し宗教方面に覺醒されて、共に研精其の人が今少し宗教方面に覺醒されて、共に研精其の人が今少し宗教方面に覺醒されて、共に研精其の人が不學を許可する事 して、只今東京化邪鳥をラーニーを三月に卒業御尋ね申し上げます、私は大正十二年三月に卒業 いど思ってゐます。 只今東京北郊鴨臺の一隅なる宗教大學に 0 さなり ました。御一同 の安否を

非常に淋しく感じてゐますが、從來特殊のものにが今年藤田君一人入學したばかりであつて此點はで、縣別にすると第一位であります。萩中出身者本學には山口縣人は澤山居ます。現在二十有餘名 限られてゐました故、止むを得ないと思つてゐま ります。 ー又强ひて御入學を勸める事も出來ないので、

> す 所感を述べて諸君の参考に供した する事になりますから、今私は勉學に就て私 様な譯で諸君に御話 事すべて専門に走つて、却つて嫌惡の情をな譯で諸君に御話し申上げたい事もありま 3

全精神を投入し其の學科の捕虜となつて其の理解ばなられて思ひます。故に一の學科に向つては、語込みではなられ、何處までも消化主義でなけれ の

席教で三昧の境と云ひます。

総べて専心になの

階光を認むるまでは決して除事を挿んではなら す。勉學は徹頭徹尾理解を旨としなればならぬ。て以て名言とし自ら努むるに足るものと思ひま ます。此は確かに私共研學の道程にある者の取つし、熱烈より失望に赴かねばならぬ、即ち迷妄より覺醒故に最初に束縛の悲運に沈淪し、次に其の束縛か の中に浸入し、而もそれから出なければならぬ。「吾人は事物を理解するためには須らく其の事物「吾人は事物を理解するためには須らく其の事物「否人は事物を自然論」の中の理會説の一節には、

除談でありますが、兎に角私共は如上の眞理より種事業に關しても共通する理論であります。此はる事が必要であります。單に勉學のみならず、諸 一意勉學しなければならぬ。 叉此が私共の義 此は諸

男兒の意氣を四海に震ひ、國家社會の高和は最後に諸君の御奮鬪と御健康を祈 に貢献せられん事を御願ひする次第であります。男兒の意氣を四海に震ひ、國家社會の為め共に共 5, 防長

青山の常盤松御料地と言へば、東京に居る者で知らない者は殆ざない。その中に古い歴史を語る様な建物が幾棟が相並んで居る。それが吾々の現在の學び舍たる東京農業大學である。東京農大会へば、州年の歴史を有し、近 東京に居る者で お大學として、

で、其他博士十四名、理學士廿三名で、何れも斯學長は農政學大家として知られた横井時敬博士

界に於ても一流の學者で、殊に有名なのは農場長思田農學博士である。思田農學博士は本大學來任までは與津國立園藝場長にして、蔬菜學の大家である。佐々木博士は養蠶學の泰斗であり、又瀧本理學士は本大學來任までは 米穀課長たる重要な位置を占めて居る。して同氏の右に出づる者もない位で、現在農林省科の出身にして、昆虫學殊に米穀害虫の研究者と

農藝化學科の三部に分れ、大學部は五年(本科三位である。學科は大學部(本科、豫科)高等科、學生間の親睦さは到底他校で見ることの出來ない 農場の經營の重任に當つて居る。又或る者は農林 る。そして其等の卒業生は主に殖民地に於て牧場、 年、二年)高等科、 省、府縣廳に技師として、又中等學校教員 斯かる教授の膝下に學ぶ學生は一千餘名で、各 研究科、聽講科が設けられ、農藝化學科は三ヶ年であ が設けられてあ 100

農場は市外玉川のほどり にあ って、 第

試験場に見る恵 町歩に亘いの見本園 を氣取る者、又或る者は害虫雑草を探し標本にす へて、午後の實習に取り掛るのである。太陽等、種々様々である。斯くして樂しい豊休み である 5 n 殊に蔬菜 殊に吾場 0 1= 國内は勿論海外までの見本種が 語々の誇どするのは、第二農場 は の水 類に於て であ が多々ある。 るの 總面積三十餘

> 感じられる。 を口すさび乍ら、 では、段々遠ざかる豚の鳴き聲に送られて、質西に沈む頃勢れた身に きずい 汚れた實習服を肩 質智

卓珠、角力、弓術は關東學生界に於て最も重視されて居る。尚毎年秋季に行はれる運動會は、京東の名物の一とさへ言はれる程盛大で、其の得意とでは、年々歳々旺盛を極めて行くのである。簡限もあることですから之で失禮します。 球、陸上競技 は劔道、 、弓術等の各部があり、歌道、柔道、角力を始め 軟球)野球、 次味)野球、蹴 殊に馬術、

内は農政研究の志士は御入校の程をお待して居りら、諸子の本校趣旨に賛同し、外は殖民地開拓、名餘であるが、萩中出身者は只二人のみであるか 名除であ 、諸子の本校趣旨に賛同し、外は殖民地開いのであるが、萩中出身者は只二人のみであるない、萩中出身者は只二人のみであ くものは か十

下されば出來る文けの便宜を計ります。

多謝し 長々不まとめな事をか 6 てい 紙面を汚した事を

同 校

市ケ谷武寮と言へば、直に堅苦しい軍隊的の學権ださ一般の人は直覺的に想像するが、それは何の理解もない人の言ふ事である。當今に於ては日本中の凡ての中等以上の學校には、現役の將校が本中の凡ての中等以上の學校には、現役の將校がある。本校は勿論將來に於て真の帝國の中堅人物を養成する所だから規律は嚴格だ。

まりに嚴格すぎるだらう つこびのリズムをいった を繋むれる帝都に送るのはにその使命を知れる我々ににその使命を知れる我々にはる。朝五時年にとび起きて、

るものもある。やがて十分間の体操もすんで、町が活動に移りかける頃は、市ケ谷臺上はひつそり関として、朝の自習に除念がない。自習がすむと、一時間程、ほんとの商賣にはいつて銃を擔ひ、ゲートルをまいて、「オイチニ」や「分列に前」をやるのである。一週間に教練が二時間、体操柔劍馬術が各一時間で、普通の學校と大差ない。しかし馬にのりまわす時の得意さは、大將軍にでもなつた時の様である。けれざも時々毬の様にころげ落ちるものもある。

語班になる。従の 後は 次に本校の 入試に重要視する するは語彙の 校の試験制度を述べて置く。 では語學で露、佛、英、獨、支の五ケ國 にやる。だから常の復習豫智が一番大切 にやる。だから常の復習豫智が一番大切 では語學で露、佛、英、獨、支の五ケ國 がの武験制度を述べて置く。 れてゐる。と

五人も來てゐる。 いと云つた様なわけで、 様な次第 一山口縣 た様なわけで、會津中學などからは十四で、殊に萩中からは此の三四年は始ごな縣からは年々志願者も受驗者も滅少する

で、諸君の内から多數本校に御志望なさつて、 置く次第である。 春共に市ヶ谷臺土に語らん日の來んことを祈つて

終りに主なる各縣出身の 本校在學生數を示して置

鹿兒島縣 岡 二四八八 二三 人人人人人人人

東京高師 より

同 校

穀を地に落して居ます。何でもない平凡な此事實吾が室の傍の栗の實も彈けて、三つ四つ二つと

英語・記録がです。 質を鳴り 努力したことを追想します、 に、茲就に か 50 されに向って、夜のます。 之に心が威應 中に居て見る事となる ていべ けどの御註文がありましたの 取りますの 文がありましたので電響でなると、興味の深い
が威應して、一年前栗の
が威應して、一年前栗の

する迄讀 何でもありません。 數學――之も本校で真面目にやつ、解釋」でもやれば鬼に金棒です。 勉强としては、 ありません。問題は算術、一之も本校で真面目にやつ 一之は中學卒業生には樂に出來ます、受驗 めば結構です。 = -餘裕の 五年の めある方は「英文の教科書を充分了知 て居る 代數各四問、 「英文の

除り氣取らずに書けば良いです。見て置く事です。作文は多くの場合平凡ですからひます。國文法は用語の活用形、係結の邊をよく下さい。數學、英語に較ぶれば少し難かしいと思 國語――之は教科書並びに參考書代數は年金算に注意を拂つて下さ 之は教科書並びに参考書一冊を熟讀して金算に注意を拂つて下さい。

面幾何三問、立体幾何、

三角各二間位です。

物理化學――各四間で、計算問題一題宛、良いさうです。 簡野さんの二卷頃から良く讀んで置け

て下さい。概して本校の出題方 針は 博く 淺 くで題一題宛出される事と思ひます。全般に汎つて見 應用問

まこ整理して置いたノート位を見るべきです。出事です。例へば英語では單語、故事、文典他の物は今では公式、國漢では單語、故事、文典他の物は今では公式、國漢では單語、故事、主意、構文、數學

他の受験生に歴迫せらる、様な氣分に成らでも食べて寝なさい、さうするで直ぐ寝らは禁物です。勉强は十時頃に切り上げて、 い、さうすると直ぐ寝られます。 ウドン

つても、 へて平然として居なさい。問題が配布せらるら除り四邊を見渡さず、天上天下唯我獨尊的 ベンを取る可き時に取りなさい。多少の失敗があ戟します。然し之に氣を留めず、落ち付いて考へ 間も無く、 掤筆するに當つて 諸 最後迄男らしく頑張られる事を希望致し ペンの紙上を走る音が、 走る音が、聴覺神經を刺天上天下唯我獨尊的に構大上天下唯我獨尊的に構 君の 御奮團

心全体が之に向つて居たら、ごうして之を退屈に感する心の餘裕があらう。― 駒田卯三郎 しのはないこ思ふ人があるかも知れぬが、其本人に取りては、決して退屈でも何でもない。それは釣するのである。元來吾人が仕事だなしつゝ之を退屈に感するは、後のはないこ思ふ人があるかも知れぬが、其本人に取りては、決して退屈でも何でもない。それは釣する 廣い水面に一本の糸を垂れて、何處に居るこも知れぬ魚の來りて餌を食ふのを待つて居る魚釣ほご退屈な



藻

村清 一先生

であります。當時滿城の士女は、開府三百年祭というて、擧町大騒をしてゐましたが、その三月ののであります。初めは唯一時の風邪どのみ思つてゐましたが、病は次第に重くなりました。醫師も學校醫の他の一二の方も見にました。今夫人を初學校醫の他の一二の方も見にました。今夫人を初め親戚の方も、熱心に枕頭に看護に盡されました。 は我が敬愛する井村清一先生の逝去といふ一事件校は誠に悲しむべき一事件に遭遇しました。それれつ舞ひつしてゐる時でありました。我が萩中學大正拾四年の春は今酣で、蝶に、花に、人は浮か が、何の効もありませんでした。途に春も深き四月 を散りました。除りに果敢なき散り際でありまし年四十五歳、あゝ川上嵐に無情にも花ははらく、 十一日溘焉として逝去せられたのであります。

> 夫人及令息、令嬢の胸中は加に平安寺の與鄰城に眠られま なき悲哀の起れ 唯お察しする外 T 情を抱が 合嬢の胸中は はあ いて参列して りません 如何ではました。生 後に残 先生は永遠 うか、 遺る建

先生は明治拾四年九月四日萩町土原に生れられて 常校の前身である萩學校に學び、後、身を軍籍に られました。先生の偉大な、强健な體軀と、沈着 な、冷靜な精神とは、よく此の間に處して機宜の 處置を誤る事なく、功績赫奕たるものがありまし たので、功六級金鵄勳章及青色桐葉章並に年金下 野の榮典に浴せられました。大丈夫干戈を執りて を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る を盡し、此の榮譽を受く、誠に一世に誇るに足る 職し、在職十有一年、其の間高邁なる人格、始めて育英事業に志し、愛媛縣立大洲中學校 人格、謹嚴と一年四月

し、 一操 日の 諸生を薫陶し、或は生徒の風紀を改善せの如く、孜々倦まず、又寄宿舍進修寮をは、生徒を感化すること大にして、所謂

なのであります。當に當校に轉任せられ に當校に轉任せられ 照たるものがあっ なを許さず、然かも なを許さず、然かも なを許さず、然かも は郷黨の子弟教育の 大正八年三月、先生らるゝ所があつた。 あ 調溫 りて猛からざる して厲、

> か 3 3

まし男の子。 ちざきの しるし大旗振り 特別會員 たてゝ今ぞ歸れり勇 T 延 彦

の子らは男の子さびしてかちざきのしるし大

庭いや高に振る。 庭いや高に振る。 三度ぞも勝 の子あはれ 5 して勝いくさせる我が男

いくさして歸り來し我が男の子ら

の子たち。豊旗はかねて銀へしその効で怠るなゆめ我が男のゑまひ宜しも。

せられて、温厚篤實の資質、 生をよく導き、よく化せしめ、殊に誠實られて、溫厚篤實の資質、沈着平靜の性りました。大正十年十一月よりは、含監

> 懇篤の天資は、煩累を厭はず、微に入り、細を穿 ち、含生の日常里号)カエ製篤の天資は、煩累を厭は

大言属色なく、全変、 特で は、 同僚に對しても、 管で 疾言厲色なく、全校を擧げ て信賴篤きものがありまし た。誠に先生を失つた事は 本校の一大損失さいはねば 前半は國家の干城として粉 の為めに寢食を廢せられた のであります。誠に尊き一 うや、してそ

せられば 大洲に 72 終は松陰先生の知 ありて、 藤樹先生の邸址に出 教師さしては、ほの郷貨にありて、ほ

を感ぜら 生を追悼するよすがと致しませう。 ませられ 今左に葬儀當日の弔辞を掲載して、 たであ りませうし、 以て腹すべ さであ

せられた

Lo

されば一校の信賴最も厚く、將來君たり。君の邦家に貢献せられし所、

粉來君に期待な武百圓を下賜

する所益多大なるものあらんとせしに、

思ひきや

朝病魔の犯す所

どなり、

級に叙せら

n

れて、金鵄助士で、青色桐葉章を下賜せら

及功六

金鵄勳章並に年金貳百

心に叙せら

岩田博藏教職員生徒を代表して、時維大正十四年四月十二日、山口 山口縣立萩中學校長 故山口縣立萩中

清一君の靈に告ぐ。學校教諭兼舍監井村

君大正八年三月職を 經過せり。 本校に奉ぜられてよ で方に六年二ヶ月を 爾來今に至るま 終始一日の如 其間恪勤

ときは

し、其功勞に依り、明治三十九年四月一日動七等治三十七八年戰役に從軍して、支那の各地に轉戰誠に本校歷史の一頁を飾るに足る者あり。君又明設に、將、訓練に、努力盡瘁せられし其功績は、 切克~子弟を教導し、 温厚篤實の天贅、 忠實克く職務に從事し、 緻密周到の頭腦を以 て、

かきは皇朝廷 0 よさ 中 ませ天地のむた限 津 江 延 彦 堪へざるなり。嗚呼爛漫た 必衰の理、今更の如くに威 の情に はられて、實に悲痛の情に 馬近去と四十五歳を一期として、盧に

は

む國の真秀道のやまとの醜草をわけてたづね しなけれ はつ

ふざも

る指月の櫻花、

発花、風雨之を傷 の関あるべ

誠を致す。 君の葬儀に臨み、聊蕪辭を述べて、恭し〈哀す、叫べざも更に答なし。嗚呼悲しいかな。 一度逝きて幽明旣に界を異にし、浮雲之を蔽ふさも、再明なる時あ 再明なる時あ 皎々たる玉江 るべ 呼べざも復還ら Lo 0) 唯君は、

教懇

大正十年四月十二日

山口縣立萩中學校長岩田博藏

枝に教諭たるここ六年三ヶ 造薦さして逝かる。嗚呼趣い哉。先生人ご爲り温厚寫實にして、我 法薦さして逝かる。嗚呼趣い哉。先生人ご爲り温厚寫實にして、我

常に自ら範を垂れて、 月、質質義勇の教訓に對し、 大正十年十一月よ 生徒

中 車 工 正 を 事が先 生の温容に接すべからざるも、親しく先生の数訓を受けし 再が先 生の温容に接すべからざるも、親しく先生の数訓を受けし 事等一同は、誓つて先生の志を空しくするここなく、各有為の材 を成就せらめて、其の薫陶の恩に酬 ひんここを思はざるなし。先 を成就せらめて、其の薫陶の恩に酬 ひんここを思はざるなし。先

て吊辭を述ぶ。

寄宿舍生総代 野 稻山口縣萩中學校 野 稻 稻

定

仇みたる虎狂ひなすときほひたちむつと組みたり二人の男の子。 り二人の男の子。

0

中

津

延

維時大正十四年四月十二日、山口縣 立森中學校同窓會を代表して、先生 の鑑前に捧く。 先生賞性温厚にして、而も護腿母校 にあるや、孜々超勉常に懈らす、終 始一貫子弟の為め誘掖指導に力を盡

き出せ龍擾虎摶今さ

かっ

されし所洵に動からす。

むか。

へさるなり。こゝに誰て吊辭を呈す。假さす、四月十日終に造焉さして、長逝せらる真に 哀悼の至に堪儼に先生の病を得らるゝや、俱にその快癒を祈りしに、旻天諦を

大正十四年四月十二日

縣 萩 中 學 校 同

秋 吉 臺野營 0 田記

第五年生

雄

大正十四年十月五 部隊の編成を終へ武裝の檢査を受け、前原教官、並に山本先生よ大正十四年十月廿五日放課後、四年生、五年生一同運動場に集合、 りの注意訓誡を受け、一同解散。天氣晴期で吾人の削途を祝するも 前原教官、並に山本先生よ

ののやうである。

人員點呼の後、校長先生よ 武裝を整へ、前庭に整列し 武装を整へ、前庭に整列し 大き變す、合圖の狼煙に一 りの訓辭あり。一行の威勢 月廿六日未明、小雨あり

めるる涙松かなJの遺跡にはそぞろ松隆先生追募の情に堪へない。休憩、直に明木街道へ向ふ。「歸へらじさ思ひ定めし族なれば一入よく校門を出たのは午前八時過ぎであつた。 金谷神社 に十五分間

立庭除忘世事

雖な行軍だ。併し一行の意氣益々猛く、目差す大田の廠舎に到着し 照りつける、数日來の日和續きに、大田街道は愈々固くかなり、困 食所に着いたのは、正午少し回つて居た。 秋晴の太陽はかんかん露、其のすがすがしさは質に筆舌の外である。先發隊の定めた晝 首切地蔵の前に暫時休憩、鮮かな朝ぼらけ、旭日に映する草木の

> 七時半人員點呼各位長より注意事項、並に明日の演習豫定を傳達の他の餘りに 質朴なのには、少なからず驚かされた。然心日を重酒保等開けて大いに吾が一行の便宜を計つて吳れた。併心寢所其亦のは、午後四時過ぎであつた。各の室へ導かれ、武裝を解いた。 就床八時。消燈喇叭間ゆ。

り、又拍手あり、可な、時々大笑あ昌だ。一同面白く遊ぶ、時々大笑あい、又拍手あり、可ない、時々大笑あ り、又拍手あり、 習、現役下士の指導を受く。午後は で天幕の張り方や、其の他の事な實 峻戡さして劔の様だ、空には一塊の起床叭喇さ共に床を蹴立てた、秋氣 九時就床。

寒鴉追走望天涯 総有霜葉 紅勝 花

今日も快晴。 のだ、中隊長より敵狀並に攻撃の方法手段を授かり、中隊は疎開所に石灰岩が露出して居る。蜿々長蛇の如き 我が中隊は、中隊長大高原だ、到る處に丘陵性の小山がある 一面に小草に蔵はれ、諸大高原だ、到る處に丘陵性の小山がある 一面に小草に蔵はれ、諸 聞く。第一小隊は先づ姫山を奪取し、續いて第二小隊は姫丘を陷し小隊は分散隊形さなり、續て火線を構成す最早ポンポン銃壁をのだ、中隊長より敵狀並に攻撃の方法手段を授かり、中隊は疎開

非常に甘い。太陽は全く四山に沒して鏡の様な月は静に戦場の野悪ではいっ、太陽は全く四山に沒して鏡の様な月は静に戦場の野悪に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 (駅に落ちて夜氣冷々さして骨に泌むの恨がある。 () 中隊長への傳令。愈々夜暖の幕は切つて落された。本嶽に響く告、中隊長への傳令。愈々夜暖の幕は切つて落された。本嶽に響く告、中隊長への傳令。愈々夜暖の幕は切つて落された。本嶽に響く告、中隊長への傳令。愈々夜暖の幕は切つて落された。本嶽に響く 炊いた。二人に就き一つの飯盒の飯を食ふのだ。 ホヤホヤこしてを築いた。午後四時より飯盒炊爨だ、地を摑つて 鑑を作り、飯を常に空腹を感じた、お陰で豊食は一入甘かつた。 酒保の前は人山前原教官よりの演習概評の後、兵舎へ歸つたの は午後二時頃、非前原教官よりの演習概評の後、兵舎へ歸つたの は午後二時頃、非 た。補導役の下士達も吾々の體力の旺盛なのには驚いたさうだ。山頂目懸けて突撃した時は、實に苦しかつた。僚心敵さ近接し、にして銃摩豆を炒るが如し」の真相を味つた。愈心敵さ近接し、れ、次に第三小隊さ共に全中隊が冠山攻撃に移つた。「戦闘正に耐

癒しに又面白く龔じた。床に就いたのは十時。 一同晝の疲れに全り」の號令に一同整列して山を下つた。 兵舎に歸つて一日の疲れ鏡聲、月に閃く刄の光。嗚呼何之物凄いシイーンであらう。「演習終 熟睡してコソさもしない。

81

午前五時不時呼集だ。 して後朝飯を食ふ、今日は驀しい故郷へ歸るのだ。 心な不時呼集だ。温い床に未練を殘して 巌庭に集合、簡單な

> 意の後一局解散した。蓋し廿六日校門を出でてより此處に四日間、れ、根據地たる金谷天神の境内に陣取り死守の勢を示した。吾が取して演習終つた。人員檢查の後、悠々萩町を通過し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であつた。運動場に整列し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であつた。運動場に整列し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であった。運動場に整列し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であった。運動場に整列し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であった。運動場に整列し、前原教校門を潜つたのは午後五時頃であった。 とが一局の面も恰々たる微笑に満たされて居る様だ。精粋袴下は を立ち、間も無く雨は上つた。塵埃が静つて却つて幸福だ。 が尖兵さなり自轉車隊は斥候さなつた。時もも天の一隅より險 悪な雲が蔓り出で直にザアザアさ 降り始めた。一行は雨を胃して が尖兵さなり自轉車隊は斥候さなつた。時もも天の一隅より險 悪な雲が蔓り出で直にザアザアさ 降り始めた。一行は雨を胃して 前進したが、間も無く雨は上つた。塵埃が静つて却つて幸福だ。 で敵の警戒部隊と衝突し、多少戦闘を交へたが、敵は忽に退却し で敵の警戒部隊と衝突し、多少戦闘を交へたが、敵は忽に退却し 吾人は身心共に貴重なる或るものを會得したのである。意の後 一同解散した。蓋し廿六日校門を出でてより此處

開校記念歌曲もの か たり

特別會員 安 藤

わが萩中學校で、 開校記念歌さして、 歌ひ來つて

見ながななない。気が、気が、気が、なが、なが、なが、なが、ない。 つて、式 る時にそれ ひり満 學年 場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ当場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ當時の五學年生徒中で、オルガンを彈くことの出來の人に、之を彈き慣らさせて、それから教授を始めた。本教論が私に「行列をすれば何か歌はせねば景心、大た様なものを三章ほご作つて、序に曲譜をも、たた様なものを三章ほご作つて、序に曲譜をも、たた様なものを三章ほご作つて、序に曲譜をも、ただ様なものを三章ほご作つて、序に曲譜をも、たが附かぬである。とで私は、一章八句の唱歌に生徒に教へる事も序に頼むとの事ゆる、先づ當時の五學年生徒中で、オルガンを彈くことの出來の人に、之を彈き慣らさせて、それから教授を始めた。各位生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を皆集め、學年別に席を定め、先づ一場で、全校生を対している。 が十る 年生に数へたが、無邪氣によく歌た、塩板生を皆集め、學年別に席をた、塩所は、寄宿舎の談話室即ち 近年十二五年十二 まの云 200 私は樂器 かは れるれ明

はら 心臓じて嬉し 一幅さいへば 生徒は を生徒は でのち徒 校 この 處が、世上には、 は、 教授は、教授は、 、後年第七回卒業生となる人々であつた、 、後年第七回卒業生となる人々であつた、 、後年第七回卒業生となる人々であつた、 であるとした故か、此日一度だけで、全生徒に適合した故か、此日一度だけで、全生徒に、一つである。とが 生徒は、平安古八丁橋本通り、田町より學 生徒は、平安古八丁橋本通り、田町より學 一の歌が今日もで持續して來た。尤も第三章 の間か歌はぬやうになつた。自然消滅である。とか をか察歌さかから取つたものと言ふ人が多 つか事 とを無邪氣に との 弾手は、ぬ 始まる 5 ひ始中時 め島々

い。先年私が廣島の街上でバイオリン彈奏者が、この曲を彈いて、之が東京の某校の作とか言うをこの曲を彈いて、之が東京の某校の作とか言うをして、他の曲の一節も剽竊はせぬので、一々そのして、他の曲の一節も剽竊はせぬので、一々その此事を知り置いて下さい。世上の訛言は信せぬや、映画に合せて作つたのである。本校生徒諸子は、歌調に合せて作つたのである。本校生徒諸子は、歌調に合せて作つたのである。本校生徒諸子は、歌調に合せて作つたのである。本校生徒諸子は、 實に嬉し いつ Do 此曲が廣 曲が廣く行はれる事は又ある。世上の訛言は信せぬやで、一々その糖はせぬので、一々その糖はは諸子は、

無線電 同 第五 學 年 に就 T 國藤 0 所感 司下 雄俊

物と考 む事は非常に多大な へて居るは甚だ遺憾な事で ある。 ラヂオを以て、一つの娛樂的事家社會の為に祝福すべき事である。併しなに於て近來ラヂオ熱が旺盛となつた。之は ものである。此に依つて間に科學的知識を旺盛な

研究的精神を盛んならしめるのである。今やラデオの前途は愈多事多忙なりと云ふべきである。然しながら四百圓や五百圓とか云ふ様な高級セットでなければ、聴取出來の場所の多いのは質に遺憾と事である。此のまゝでは普及と云ふ事は六ケ敷とい。これでは資財家の専有物を見た様な事になるのである。何處でも五六十圓で手輕に充分に聞き得る様にしたいものです。斯くなれば津々浦々に至る迄、萬人が此の天惠に浴し、眞にラデオの研究が出來るものである。 とこれでは資財家の専有物を見た様な事になるの成功や偉大なるものである。 是に於て我等は今夏以來ラデオ研究會なるものを是に於て我等は今夏以來ラデオ研究會なるものである。 上海、大連の放送を聴取する事が出來た。故に厳優にして、斯くも遠距離の放送を聴く事が出來る自た。 「でして、斯とも遠距離の放送を聴く事が出來を進め、今やローロッスREL形をセットした。この價格七十圓餘にして、資にして、斯とも遠距離の放送を聴く事が出來をで、表古屋、上海、大連の放送を聴取する事が出來た。故に厳事を、表述方の人々に了解して貴ひたい。此の意味を表述を表述を表述を表述といる。

事を、萩地方の 味に於て先般の に於て先般の展覽會を開 して貰ひ あい 0 なかの意

83

ラデオを研究な たらずこの言に かか。世人が を代表 デオを研究なされん事をこゝにラデオ オを研究なされん事をこゝにラデオ研究會員がこの言に恥しからぬ人物となり得るではな知識を習得し以てラデオを知らざるは文明人がは悪影響を及ぼすものではない。却つて多 していささか希望するのである。

香川津二孝子

特別會員

類まれな! まれなる玉くしげ 職弟を 小畑の里の香川津に が畑の里の香川津に 3

貧しき中に朝な夕なに なりなにたち昇る 進めて親を勢りの心用ゐてことさらに

生さぬ中なる垂乳根があるでは善き権職の つゆ中垣のへだてなく

思ひ立つ日が吉日よ 明日さらいはじ今日いま」

心合せてはらからが 語る折しも日は落ちて ではしる聲すなりなほも手段をかにかくさ

懸けし願の今日はしも 下 報表にいでにけり 報表にいでにけり

祈るふたりの音の 今宵はわ たりの心には 雪も嵐もものならず空かき曇り雪降れざ

身を提羅し 脚み 性。社みはば 果や辿さま 着れ 祈願をしば、 額点が新 しこめてける がっきて、

いざ弟よ「兄上」と 御の容態氣造し かも なみに助けつ

> U n 厚き親みは 生みの利吉

中は産後のなやみにて山の木の葉の紅葉してかくて月日を經る程に の床に H うちり 臥は長 しは 陈

2 はの

母山か

二人はいたく悲みて 極もいもね! にけり

「御病なほしまつらんさせんすべなくて權職は 醫者も疎はなけ れざも 少しもしるし現れず 我等も手をば盡しきぬ

食物たちて垢離とりて 立願せんは、 い其外かのあ にぞ」と

心を碎く折からに よくもぞ氣附き給ひにし

親を思のひとすち 1: 家路を指して歸り行

鮮打つ波も摩添へて かいでですれご抄らず 荒ぶる吹雪物すごし しほつのる夜嵐に

本石ならね人の身の 本石ならね人の身の 疲れし身をばいかにせん

あはれ幾度倒れけん 引く手取る手も弱りつ ははやれごも n V 堤の長路行きなやみ 力は盡きてあづさ弓

心ばか

5

下に其の身は埋い 下に其の身は埋れて 北きもれやらで降雪の かかに果なくなりにける

となりて人の子のはいかで際るべき お後つ 後まで孝行の





◎第二十五回卒業式

の來賓總代さしての祝辞、父兄總代の謝辭、卒業生總代の答辭、在 を立しもの左の如し。 一、學力俊秀にして能く校則を守り、伍長さなりて能く其の任務 を遊したの記録等あり、午前十一時過終了す。當日卒業生にして を遊したるもの 興し、學校長告辭、知事代理さしての関郡長の告辭代讀、平淵少將校長勅語捧讀の後、卒業證書を一括して、 卒業生總代山本馨に授賓には平潔、山田、岡田、松田少將を始め、官公吏有志多數あり。學室月三日午前十時より第二十五回卒業式を講 堂に於て舉行す。來

- -常川明、馬來誠「本妻」、織山三郎「本馨」、織口三郎
- -, 本學年間室長さなりて能く其の任務を盡したるもの谷川清、田中勝太郎、中塚俊二、井闕清榮、大谷正信、山中不二夫、吉田勇、山本浩、橋本士郎、林不二雄、田中松一、河北寺、古田勇、山本浩、橋本士郎、林不二雄、田中松一、河
- 本學年間皆勤せしもの

| 本學年間精勤せらもの 中塚俊二、井闕清榮、大谷正信、三島文平、岩田貞夫、堀文吾

- 橋本士郎、常川明
- 山本馨、瀧口三郎、阿部悌甫、谷川清、田中松一、大谷正信卒業の際七席以上にして、同窓會より獎學賞を受けしもの 山中不二夫

の如し 大正九年入學生にして、今回卒業せし生徒は、入學以來報學年平均大正九年入學生にて四分六厘二毛に當る。 廢學 二六なり。 廢學 学業六八、進學九、在校生二八、轉出校七、廢學 二六なり。 廢學 学会平均一ヶ年にて四分六厘二毛に當る。 廢學者二六人の內譯左 歩合平均一ヶ年にて四分六厘二毛に當る。 廢學者二六人の內譯左 少元年入學生にして、今回卒業せし生徒は、入學以來報學年平均

一年未修了二、二年未修了九、三年未修了九、四年未修了四、病氣原因六、成績不良一五、事故五 五年未修了二

◎縣立學校生徒獎勵

規程に依る受賞者

一、特等賞(平素勤務にして能く校則を守り、學力俊秀にして伍四學年以下の生徒に對し、賞品、賞默の授與式行はれたり。四月八日、新學年の始業式後、恒例に依り、前學年度に於ける第四月八日、新學年の始業式後、恒例に依り、前學年度に於ける第 長さなり、 能く其の任務を盡したるものと

一年、岩武既香

夫、石原孝、弘質明、藤井端、一年、宮原進、金子鶯朝、中で、等外(本學年間精勵せしもの)共、松岡雅彦、篠原正太郎、吉村醇、野中清七、二年、高橋建、松岡雅彦、篠原正太郎、吉村醇、野中清七、二年、高橋建、松岡雅彦、篠原正太郎、吉村醇、野中清七、二年、高橋建、松岡雅彦、篠原正太郎、吉村醇、野中清七、二年、高橋建、松田清、中澤銀市、堀久四年、石原孝、弘質明、藤井端、一年、宮原進、金子鶯朝、中澤銀市、堀久四年、石原孝、弘質明、藤井端、一年、宮原進、金子鶯朝、中、本田、田 (本)

- 一等質〈學力後秀にして能く校則を守り、佐長さなり能く其
- 稻清定、二年、板垣禮作、峯闖良文、一年、五鳥直人、三好四年、岸音熊、松浦솵三郎、田村義雄、三年、永富五郎、野の任務を盡したるもの)
- 一、二等賞〈平素勤勉にして能く校則を守り、伍長さなりて能く
- 其の任務を盡したるもの)

 其の任務を盡したるもの)

 三等賞(本學年間伍長こなり、能く其の任務を盡したるもの)

 四年、有美逸、阿武義輔、大和忠雄、村木忠治、廣順一、大四年、有美逸、阿武義輔、大和忠雄、村木忠治、廣順一、大四年、有美逸、阿武義輔、大和忠雄、村木忠治、廣順一、大四年、有美逸、阿武義輔、大和忠雄、村木忠治、廣順一、大路政・香川俊男、梶村次郎、三年、森澤史郎、小原美紀、西等賞(本學年間伍長こなり、能く其の任務を盡したるもの) -
- 四等賞(本學年間皆勤せしもの)三等賞(本學年間皆勤せしもの)三等賞(本學年間皆勤せしもの) 600

87

姓名は同窓會誌に譲る。 は日国窓會よりも、各學年成績優秀なる生徒に獎學賞の授與あり 山田只夫、岩本賴夫、田村秀雄、武本光雄 八本報夫、田村秀雄、武本光雄

更选

大正十三年十一月以後(前号報告後)先生の更迭せられし者左の

△蘇井一郎先生 大正十四年五月、依願職を免ぜられ、九州帝國
△室橋春爾先生 大正十四年五月、依願職を免ぜられ、岡山縣金
光中學校に奉職せらる。

△本間孝先生 大正十四年四月、依頼職を解かれ香川縣丸龜市立 商業學校に奉職せらる。

△山本彌次郎先生 大正十四年四月、山口縣師範學校附屬小學校 より來任せらる、國語、漢文科擔任。

△岩木益雄先生 大正十四年四月新任せらる、數學科擔任

△板垣克先生 大正十四年六月、依願職を免ぜられ、其後廣島市 △編田照夫先生 大正十四月五月新任せらる、英語科擔任 山陽中學校に奉職せらる。

△三浦梅次先生 大正十四年七月、山口縣豐浦郡豊浦尋常高等小△野田淳一郎先生 大正十四年六月新任せらる、物理化學科擔任 學校より來任せらる。体操科擔任

以上の他教練教官さして陸軍歩兵大尉前原四郎先生、大正十四年

來任せらる。 先生は本校第五回卒業生なり。

(重大正十四年 十 月)

誌(節略)

請演ありの

○結論部大會 十二月八日、講堂に於て開會。

○寒稽古 大正十四年一月十日開催十九日終了。

〇長距離競走 二月十日舉行。

〇卒業式 三月三日舉行(別項參照)

○陸軍記念日講話 三月十日、松田陸軍少將の飛行機及毒瓦斯に

○第一學年入學試驗三月廿七、八兩日舉行四月九日入學式を行

〇井村教諭死去 四月十日午後六時死去せられ、 十二日葬儀執行

受い京阪地方に向ふ、五月三日歸校。
○修學旅行 第四學年生徒百拾九名、四月廿八日午後七時萩驛出生徒職員参列す。

〇一日遠足 及仙崎に、第三、五學年は三隅及深川村に一日遠足をなす。一日遠足 五月二日、第一學年は萩町史蹟巡り、第二學年は三隅

流わり。

○競技會 九月十二日本校生徒及萩商業學校 生徒聯合の競技會學○武道大會 七月一日縣行。

○競技大會 十月十八日第廿六回創立記念式舉行、引續き競技大四月大會あり、競技部選手は優勝族を獲得す。 四月大會あり、競技部選手は優勝族を獲得す。 三日、行いて

會を開く。

○展覺會 十月三十日、第三、四[®] 秋吉豪に向ふ、廿九日經事歸校。 ○野外演習 第四、五學年生徒は野外演習の爲め十月廿六日出發

は三十一日も開く。供せで理料、書道、鑑道、地歴科の展覧會を開く。 四學年生徒の父兄保証人會を開き 理科部のみ

> 錦上更に花を飾りました。 で、紙面が非常に賑はしく 謹んで御禮を申します。 断片二三を下さつた事も、 なりました事を喜んでるま 生方の御投稿が多かつたの 今回は前原先生を始め諸先 校長先生及駒田先生が 輯





會

◎競 技 部 記事

▲山高主催競技大會

一、百米決勝 勝旗返還式を行ひ、八時半から競技開始したが、 天氣晴期にして四日午前八時より舉行せられた。十一校の選手入塲式に次で、 優小口高等學校主催第五回近縣中等學校陸上 競技大會は、五月二十 申分のない運動日和であった。其の日の成績は次の通で、 廣陵の

急 吉岡(廣陵)

二、二 百 米 一等 高井(廣陵) 二等 佐藤(廣一中) 元等 内田(全) 三等 佐藤(廣一中)

三等 河野(廣一中)

三四百米二等

四、八百米よイム决勝 一等 安達(徳中) 二分十三秒 我が校の角屋君は二等の倉西君ミー尺も違はなかつた。 三等 角屋(萩中) 三、四 百 米 一等 高井(廣陵) 五七秒五分二 二等 光井(湖中) 三等 四本(廣陵)

五、千五百米メームとは、賞に入らなかた。我が校の大谷君は五等となり、賞に入らなかた。 千五百米以十五次勝 一等 久保田(廣陵)四分三七秒五分四

> 六、五千米決勝 一等 久屋田(徳中) 三等 安達(徳中) 二等 酒田(徳中) 三等 安達(徳中) 一等 久保田(賽陵) 山下(仝) 三等 中田(廣陵)

一等 魔陵チーム 一分二八秒五分四 藤井(廣一中)

八百米リレー

八、ローハードル 一等 内田(廣陵) 二八秒 八、ローハードル 一等 内田(廣陵) 二八秒 今日はトップの能美君が足を怪我せられてぬたが、廣陵の 山中チーム 三等 二八秒五分四 萩中チーム

一等山中チー 三等 河野(防中)

- 走高跳 一等 し 土木(震陵) 一米六八

一,走巾跳,二等 二等等 横田(全) 山縣(仝.) 六米三四 三等 安田(山中)

我が校の河野君は惜し にて四等さなつた。 三浦(萩中)

三等 高橋(防中)

三等 岡本(山師)

趣しくも三年さなった。 二九米三 三等 村木(萩中)

工等 廣島一中 八點 四等 德山中學 八點

五等 裁中學

▲春季競技大會

る五月廿七日 海軍記念日に開催せられた。午後は小學見童のリンエ月廿七日 海軍記念日に開催せられた。午後は小學見童のリン五月廿七日 海軍記念日に開催せられた。午後は小學見童のリン五月廿七日 海軍記念日に開催せられた。午後は小學見童のリン

米米米等等 第三中隊 二 等 第二中隊 四 等 金田 爺清(二四秒八) 能革 能美誠一(全) 第二中隊

八一下ル米米米 大谷仁三郎(四分五二秒八) 末永 徳(全)

幸一(二九秒八)

槍砲闘リホ棒巾 丸盤レツ高 投投投ーブ飛飛 河野 一男(九米五九) 山縣 定芳(三米一〇) 第一中 隊(一分五○秒) 第一中 隊(一分五○秒) 新谷 活助(一〇米二〇) 田中 の(村木忠治記) 次郎(仝)

▲第二回競技會

一、百十二 四、百 三、百 八日 擧行、レコード左の如し。 - 二一二 一等 一等 一等 二一位 一等 楊田 川林 能 小田 來 網 惠 大 優 渡 井 邊 中 美 林 中 島 屋 本 津 川 邊 茂一 卷男 朔一 隆雄 三等 烏屋三等 烏屋 (一四秒) (一三秒五分一) (一三秒五分の四) (一三秒五分四) 三年 (一三秒五分四) 野田 吉屋 小林 宋武

92

1111-

百

等

三等見

111.

二一二二二等等等等

(二六秒五分四)

秋丸

0 11, 四 千五百米 1 ハードル 百米 Ħ Ħ 百 二等 一等 末成 二等 板垣 河村 三輪 **楽藤村** 松井 池內 神野 (商業) (商業) (商業) 國亮 秀男 京一 與三 三等 峯岡 三等 雅川三等 雅川三等 水野 (三一秒) (三二)秋五分二) 三等波邊 (一三秒五分二) (一三秒五分一) (一分五秒) 三等 三等 紙本 三等縣田 (五十九秒) 三等中村 (一二秒五分四) 三等藤下 水品 田上

-T 田中(商業) (二八秒五分四)

(四分五六秒五分四)

三四、 111111 100 二九、 111111 八百米り 走 ---八 -丸投 中流 高 百 萬 百 百 投 * 茂一 二等 二等 一等 等 一等 一等四种对山野 山村米新米河山村 米廣谷 医野村 松王 松王 邓 (一分四四秒) 能阿仙小三紙中田松矢 來島 大谷仁三郎 林正次郎 阿武殿夫 澄川操 信一 誠一 専 三等 三等 田中 (五呎四) 新谷 (三〇米三〇) (五米九一) 三等 伊臻(商業) 三等 自石 三等 (二分三五秒五分三) 三等 (三九分五〇秒) 三等阿武 小野村 大和 松井

田中

水 高 一二等山田田 田中村 次郎 ○二米九○〕 三等田中 三等 中村 村木

九月十二日舉行、 -百 ▲第三回競技會 一等 服部(商業) (一二秒五分一)

砲丸投 新谷 米歐 能美 松王 (一一米八二) 三等 寺戸(商業)

四、千五百米 走高跳 一二 植村(商業) 田中 **次**郎 (四分六四秒) (一米六二) 細井(商業)

四 百米 巾 服部(商業) 中村 三等 桑原 三等 来永

一华 秋山 金森幸一 三學河野 (二九秒五分二) 水野

植村(商業) 二分二〇秒

棒 大田(商業) (三米二〇)

> 10,11 -=-八百米リレー " 盤 萬米 百米 金田 泉清 (一分四三秒五分三) 一等 山村 次郎 (一一米九九) 村木 米廣 松王 松王 林 阿 山 武 縣 松王 (三〇米〇九) 巖夫 三等 四村(商縣) 三等 新谷 (四一分五八秒十分九) 龍美

◎陸上競技大會記事

冷々した秋の朝空を振ひ動かす開校記念歌に、十月 十八日第二十 一回百米にプロケラムは進行と始める。 年前の部 年前の部

の部が終る。 の部が終る。 開會より三時間にして豫定通り十二時十分午前 大選手) 開盤、槍投、走輻飛、走高飛(選手並びに個人) 及び小學 丸(選手) 開盤、槍投、走輻飛、走高飛(選手並びに個人) 及び小學 丸(選手) 開盤、槍投、走輻飛、上高飛(選手並びに個人) 及び小學 の部が終る。

部、

二十分の体憩早くも盡きて、グランドは午前に倍する活氣を呈した。トラックは八百米に始り、フィルドは砲丸投に始る。 観覧者は次第に増して、折しも目曜のこささて、近來に無い人出にて、二時頃さしもの廣い運動場も、人垣を築いだ。 一時小學校八百米リレー豫選を行ふ。續いて我校選手の問盤、走編跳、棒高跳、ホ、ス、ジャンプ、八百米、百米、四百米、 ハードルを行ふ。過日山口に於ける大會にも増した元氣に、競爭は 行 は れ、 満場手に汗を握る。三時半一年生二年生の綱引、 續いて五年生の百足競走を行ふ。何れも興味深く哄笑裏に終り、プログラムは急速な進 行か見せて、何の澁滯もなく、百に餘る回敷を重れ、終に各小學校選手八百米リレー決勝戦に入る。 其の結果優勝族及花環を得たのは次の二校であつた。

株りレー終を告げ、一等は第一中隊の得る所さなつた。 米リレー終を告げ、一等は第一中隊の得る所さなつた。 第三等 第四中隊 十七點 第四等 第一中隊 二十點 第三等 第四中隊 十七點 第四等 第一中隊 二十點 東三等 第四中隊 十七點 第四等 第一中隊 二十點 大路 第三中隊 二十點 第二中隊 二十點 大路 第三中隊 二十點

因に當日參加小學校名を掲げて敬意を表す。

ヶ濱、紫福、篠目、福川、大井、以上十四校(崎、椿東、川上、椿西、明倫、白水、三見、奈古、 深川、越

> 〇四二百百百 *** 稽當日のレ 三十八分五十秒二 五七秒 二分二十一秒八 一一秒八 一分四八秒二 河 米 米 河末山中 第 金 野 廣 野 岡縣村 二 森 大谷仁三郎 大谷仁三郎 大谷仁三郎 一 松 松 一後定十 中 幸 男 王 王 男介芳郎 隊 一 (波多野生配)

◎長 距 離競走

長距離競走成績表 二月十日施行した、成績左の如くである。

等級 アノー 五六 五六 三 人出 人落 三人到 五八分五七秒 間一

			合計	0	111	1 :	合計	11	八	29	合計	t	1	H	合計	111	九
全校生	第	總評 佐		四ノニ	四八一	四ノー		ニノニ	ニノニ	ニノニ		ニノニ	11/11	11/1		ニノニ	
徒長途競	三等一	11 48 11	一四九	五	II.	四七	一五二	四九	五四	四九	一六三	五五五	Ti	五二	二六三	Ti.	五六
爭平均時間	中隊	中隊	九一	三九	二四	二八	一〇五	三四	二十	111111111111111111111111111111111111111	一一六	三八	四三	三五	1111	三八	三五
[0]	四	第二等	一六	九	-	六	1	0	100	0	11	11	0	0	14	11	
	四中	中	七五	110	11111	fills	100	三四	三六	三四	一四	三六	四三	五五	一〇八	三六	三四
	隊	联	-	-	九四、五	111.0	七二	五二	0.1	六、四	七、四	九、四	H. O	八、一	五九、一	五、四	
			Ti.	1	11	六	六	九	-	=	0	七	-	-	六	九	-

山口縣教育會主催 縣下中等學校陸上競技大會

ありてより、愈血湧き肉躍る若者の力競べが始まる山口高等商業學校スタヂアムに於て擧行、例にも山口高等商業學校スタヂアムに於て擧行、例にれ、全校生徒の聲援に送られて山口に行つた。 スポー りました。 十月二日我校選手は相島、三浦兩先生に引率せらは再び縣下運動會の覇權を握る事が出來ました。 ッに依つて、關西に名聲を揚げてゐる我校

めたのだ。雨混りの寒風だからやり切れない、十一等米廣君が、大物を飛ばす。新谷君もよく伸ぶだ。何なく入選する。内では砲丸投げが始まる。 走る。猛烈なストライドだ。老練中村君もあの元氣は、若武者阿武君も我努らじとテープを切る。續前年度の猛者能美君が、輕く百米豫選をバスすれ

右十三年度は落伍者多

かりしため斯かる不成績さなれり。

十十十十 九 年 年 度 度 度

五十七分五十三秒

六十三分五十九秒

トン必て君いか気出はし大に勝づ共りかな場残通 あ 谷、立をり響、ドナ、阿、せ念 す四いあつ 1 14 14 四つ君の期ユいルー、武ね たボハ、選四、とよならなトレド、例十に 飛び出 目る レド、例十、にぬ百が選林君、ッし 植た號除ーラ、の三、能米スで君がクなこに村、砲人スト金、年、農業第タ角、も思でがれ、 り植た 人君君がの一だ森腹然君、二ト屋、よびはの一次一温選萬、君、の他自豫は君、く切引 らが加

衝れースく れだ他てが たつのる出 ッチ君を修べ君ド戦 台にが も 掛る 溝、が ヒ が も 、二十三回目が敷へられ た選る來 **滯**,手 始めた、果せる哉ラストラツブ後猛烈が始まつた。大谷君が段々トップに追とートだ、だがもう遅い、出足の早かが一着だ、大谷君は五十米着差を作つ。 清部君も好く最後まで奮闘した。次に も思ひ隨分飛び出る、林君が殿をうま に出て來ない、タイム一分四十秒。 に出て來ない、タイム一分四十秒。 0 \$ 部いは ・大谷君は五位位にて好いべー のな情况が廿回位まで練いた は全く混亂してしまつた、先日 は全く混亂してしまつた、先日 のな情況が廿回位まで練いた に る、七人 0 意氣天を 8 た選手 - 1 拔

選に歩美本トいあ君、晴中リい劈だ静、なれれなる村、ンで頭のな いむ君校ラんれ山な村、ンで頭 田口の夜が明けた総てが 我々 を 一百米第二条選、南日よりの奮闘に觀衆、 一百米第二条選、南日よりの奮闘に觀衆、 一方まく角屋君を誘導し、三四着に 一方まく角屋君を誘導し、三四着に 一方まく角屋君を誘導し、三四着に 一方まく角屋君を誘導し、三四着に 一方までは百米決勝あり、前然他を歴し、 一般が始まった。山村君四等入賞。 一般のスプリントはフィールドので 一般では一般で出せし問い。 一般では一般で出せし問い。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般では一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般では、フィールドのでは、 一般である。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般で出せし問いた。 一般である。 一般では、 一般で出せし問いた。 一般では、 一般である。 一般で出せし問いた。 一般である。 一般である。 一般で出せし問いた。 一般である。 一のである。 一のでなる。 一のである。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 一のでなる。 H 回に観衆、萩中のスプ か偉力を表す日だ。 かなるとというでは かなる様 日に限った。

プカし棒大本。 い問レ

> リ學、努か、 に名ら心 研究を望む をなされたけ たけれれ な かぎ 6 ったる、雨 。 兩 河 君 河、 に、 以野、 後君、 切踏 1: み山 切村 助り君

念れ自日料料 後將 のに」 の努力も空しく気を動きのの 優勝出すの調子 來した、 なかつたのに、問題なし。 はト

美録・能・林・終・三フ髪さ四八走合とを事手美・君・に、十イ念れ百百のは共飛入五君、ス三、米一。、米米科・ りにド美事 賞百は、タ度、投ル 敗 後次米相、照けド は着 金だは賞 石が切りを 走る。 まくつ がある。 飛ばし、

當の是、以を我終そ、微でない鳴、十ンを 日は、我、來、遂がに吾、笑、來、吾、呼、九をかけ の實、稜、四、次校先々をる、軍、我、移得る っ後、大、開、告堂諸必、り、あ、エ・勝、にやの上、で、て力阿、 " 为5 る、た、一、盛五も、。年、况日

敗戦 名 得點 名 35 十 二 部

(甲)出席者一日平均數調
○武道寒稽古出勤狀况表 萩中五十九點(一等)萩 走 ウップステ 跳 跳 山河 河山 田山 末山 米村 新米 林阿金能 秋金 大溝 大中 角中 村野 野村 中田 岡縣 廣木 谷廣 武森美 山森 谷部 谷村 屋村 灰一 一次 次 傍宮 松東 江加 **灰一一次 次 俊定 松喜 活松 次巖幸誠 幸** 三菊 三四 奥四 良男 男郎 郎哲 介芳 王八 助王 郎夫--- 晃一 郎雄 耶郎 三郎 12 53 15 10 10 25 2

 ★正十二年 度 校生徒每日平均七割八分弱、出勤期大正十三年度全校生徒每日平均七割八分弱、出勤期大正十三年度全校生徒每日平均七割八分弱、出勤期大正十三年度全校生徒每日平均七割八分弱、出勤期大正十三年度全校生徒每日平均七割八分弱、出勤期大正十三年度全校生徒每日平均七割八分弱、出勤期、 减二二 增二二 均一 六一八 四六二 人员 一九〇 七八一 員平 出勤期間十四日 增七六四〇六七二五七二 减一 减一 期四四 間

增 二六 二五三 四一三 〇五五 五四七 减 减 百 分八八 百 分 四 一 五 七二九 比

▲京都青年演武大會

る、 たえまで、 一七月下旬 京都武徳殿に於て、 本校出演選手氏名及成績左の如し 京都武徳殿に於て、第二十六回青年演武大

第一回戦に於て、

郡本 甲本 中校 中校

貫郎 明作

本町 田野中 年實 學 清彌弘等隆

山口縣體育大會

出演選手氏名及成績次の如じ。大正十四年十月三四兩日、第十一回體育大會な開催せらる、

○~一一一

校學

は必要なる條件故に各自一時的にあらざる自覺を切望する。十八校中第四位さなる、所感、平素の練習さ工夫さ試合敷さ點。田村義雄十三點。清水豊吉(補欠)總點五十三點、出演校監。田村義雄十三點。清水豊吉(補欠)總點五十三點、出演校

柔道部

第 中 副 大 二 堅 將 將 板垣 油根 支作 遊作 **永田宗一郎** 新山半治郎 (勝5引分6頁1) (勝2引分5頁3) (勝2引分5頁3) (勝2引分5頁3)

總點數19出演校十三校中第五位こなる。

▲寒 稽 古

十日大會を行ひ、試合後寒稽古皆動精動者に對し賞狀を授與す。一月十日より、同十九日迄柔劍道廟部共十日 間寒稽古を行ふ、二

◎辯 論部記

ても鑄論の力に待つより外に仕方がない。偉大なものは辯論の力ーの思潮に取り卷かれたもので、 此を料理して行くには、ごうし漸く平和の鍵を開いた。 斯くして更生した世界は、デモクラシイ幾多の生靈と財力さを捧げた歐州大戦も、 舌三寸の力に依つて、

である。世界を左右する法典や、パイアルも皆辯論の結晶に過ぎない。吾人が人さして一定の思想あり、精神あり、養務あり、自覺がある以上、此を他のものに發表したいこ云ふのは當然のここである。殊にそれが青年である故に、自然の者の中から生れのである。明治の維新は銀より生れたが、大正の維新は吾人の舌の中から生れのである。明治の維新は銀より生れだけ青年の辯舌は、老人のそれに比して尊いものである。 斯の様な意義に於て、木々の精の茂つて、漸く男性的の氣分に浸る事の出来る清新の夏の日、恰も六月二十五日春季辯論大會に浸る事の出来る清新の夏の日、恰も六月二十五日春季辯論大會に浸る事の出来る清新の夏の日、恰も六月二十五日春季辯論大會に浸る事の出来る清新の夏の日、恰も六月二十五日春季辯論大會に浸る事の出来る清新の夏の日、恰も六月二十五日春季辯論大會に、森中健兄の舌端を以て開會の幕は切つて落された。そのプロは、森中健兄の舌端を以て開會の幕は切つて落された。そのプロである。世界を左右する法典や、パイアルも皆辯論の結晶に過ぎである。それだけ青年の辯舌は、老人のそれに比して尊いものである。近日本社会に表して、東洋の人に表して、東洋の経過を表しました。 グラムの順序次の様である。

(九)起て新時代の青年よ	(八)懐爐の殻	K	(六)輪廻を豫言	(五)青年の抱負	(四)弱きものよ	(三)幸 福	(二)感 化	(一)維 新
四01	私の一	五の二	五の二	五の一	四の二	11101	四の二	1101
柳井 敬三君	田村 義男君	信一	岸 音 熊君	阿字雄鯉溯君	黑磯 治夫君	大谷仁三郎君	河野 三良君	藤田 梓君

(十)逆境に處して

五の三 多田 利雄君

計

ド本吾人の發展は南か北?(四年生)

早生柳井、時澤・中原、久保田、 新山諸君の共作に係る「萩町はたのは、實に愉快とする所である。特に人目を驚かした物は、四は、 昨年に比して規模及び緻密の點に於て著しく進步の跡の見に は、昨年に比して現実及で最終の古ことに、本年の出品物我部は、十月卅日を期して地歴部展覧會を催した。 本年の出品物 之又精巧を極め觀索の注目を引いた。 共同製作なる萩町の大模型圏等である。水野、松岡君等の模型圏 ごれ程食ふか」の出品及び四年生濱村、森澤、永松、仙波諸君の

名である。別選入賞は一名あつた。(野稲生郎)入賞者合計九二人にして、一等五名、二等三十六名、 三等五十

記

等、二等、三等、等外の四等級を附せしものなり。 一等賞を得し替の下に書せしめ、その中より住良なるもの を選拔して、之に一陳列品は例の如く、昨年十一月以降本年十月迄の 間に於て教師監 かご、豊頃より漸次晴天に赴きしため、多数の觀覧者ありたり。を機さし。生徒成績品展覧會な、舊講堂に開けり。朝は昼天なりし 十月三十日、我が部は昨年の例にならひ、三、四 學年の保證人會

もの左の如し。

第一學年 第二學年 第二學年(現在第三學年) 田原 養雄 五鳥 直人文

將來益々我が部の發展進步せんここを祈るの名武生記) しめたり。我等は参考品の多數出品せられんここを望む。 最後に の第四學年吉賀君の書は英の出來榮見事 にして、人をして感動せ

◎書道部記

(大和正夫記)

◎理科部展覽會記事

に於いては見るべきものが甚だ多かつた。 此後も我が埋料部の登て擧行され、 去年に比して益々發展擴張の質を擧げ、殊にラヤオ大正十四年度の理料部展覧會は十月卅日及び卅一日の 隣日に渡つ 々發展せん事を断る。 さて理料實驗室は例の通りに生徒製作品を 今年は新工夫の物が多く、

が高過ぎた感がある。松井君等のも立派に出來て居た。電燈比色就職は一般人、殊に女學生の參考になつたこ思ふ。永田、山根、益田、阿武君等の文化住 宅は良く出來て居たが變壓器に故障が起きて電燈がつかなかつたのはお氣の毒でした。機械室の水質檢査空中網菌培養は殊に地方文化に役立つたこ思ふ、此に從事せる役室中網菌培養は殊に地方文化に役立つたこ思ふ、此に從事せる役別者の發表であるから、有益な事が多くあつた。 機械室の水質檢査の發表であるから、有益な事が多くあつた。 此後も益々研究に研究を積まれ、ラデオ研究會の發展せん事を祈る。 動力室の賣店の成積も良好で、ソースは去年のよりも良く、香水ビリー化粧水は飛ぶ様に賣れ、賣品不足になつた、博物教室は例年の通りに標本を列べる外に、今年田中先生が笠山に於いて發見せられた天然橋や寒響熱帶の地衣類を陳列し、一般人の知識を廣めた。概して此の底積も良好で、ソースは去年のよりも良く、香水ビリー化粧水は、水の時に際して我が栽地方に理科學の普及の足らざるを遺憾さな、此の時に際して我が栽地方に理科學の普及の足らざるを遺憾さな、 へられたい。理科教室のキネオラマは小野、中村兩君の盡で、かもは良い思ひ附きである。 鈴木、橋本兩君のゲーイブルカーや、もは良い思ひ附きである。 鈴木、橋本兩君のゲーイブルカーや、田君の犬の家、柳井君の機械裝置、三年河村 君の電氣應用の米つ く申す僕の電氣燈明でかなり成功した様に思はれる。 然し地平線

◎大正十四年度中隊幹部

隊	四中隊	小隊	第三中隊長	小隊長	二中隊	小隊	第一中隊長
村木	岸	村木					
忠大	音熊	喜八	義輔	茂樹	邊	利維	義雄
大和		井上		藤村		松井	
忠雄		宗親				利明	
藤田小		益田		部田		田田	
小太郎		全		壽男		明	
	隊長 村木 忠次 大和 忠雄 藤田小太	小隊長 村木 忠次 大和 忠維 藤田小太四中隊長 岸 音熊	隊長 村木 惠次 大和 忠雄 藤田小太隊長 岸 音熊	小隊長 村木 惠次 大和 忠維 藤田小太小隊長 村木 喜八 井上 宗親 益田 爺三中隊長 阿武 義輔	小隊長 村木 忠次 大和 忠雄 藤田小太小隊長 村木 喜八 井上 宗親 益田 輸三中隊長 岸 音熊	小隊長 村木 惠次 大和 忠維 藤田小太小隊長 村木 喜八 井上 宗親 益田 爺三中隊長 阿武 義輔 藤村 和輔 窪田 藤三中隊長 村木 喜八 井上 宗親 益田 爺	小隊長 有美 邊 松井 利明 山田 小隊長 有美 邊 小隊長 市原 茂樹 藤村 和輔 窪田 巖 三中隊長 阿武 義輔 八 井上 宗親 釜田 輸 一

◎大正十四年度校友會役員

劍副會

守重 部長 問題 新田校長 部長青野先生 光雄生生

原大野有阿田村稻美武

芳武 清 省

委員部

野 公	井上 宗親 波多 繁夫 波名	八 國弘 三郎 廣 順一 村士	部長河野先生	昌平 渡邊 夏介 秋	徽 岩武 野彦 村	部長金子先生	邓 矢次 福正	將 原田 正人	夏文 池上		恒夫	晃	正夫 松井 利明	小野 靜雄 玉置 馨 中村	田總先生	政敬	敬三	田明多田	田村 義雄 國弘 三郎 岸	部長伊藤先生 副部長香川先生	大賀 修 吉屋 安雄 田中	板垣 聽作 峯岡 良文 白石	郎井上	田中 仁 永田宗一郎 山根	
歌長古川先生 副部長香川先生 副部長香川先生 副部長香川先生 副部長香川先生 副部長香川先生 副部長 古川 保政 宗一 岡田 上野 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	公競技			兵一	八郎					博		総郎				正治	三郎		音熊		敏亮	茂次 地			
田 田 別		型	津文雄	大和 正夫	阿武 省三	部長船木先	修	田春雄	省吾	折本 秀顯	守重 光雄	部長相為先生	徳太郎	五郎	武雄	香川 俊男	部長村岡先	宗一	敏夫	色蔵	廣順	部長古川先	船 清定	枝清	
作事 重 太次一 一吾 三一三忠 即一武雄 调耶郎郎仁 武泉市 郎郎郎雄 伸武		野 七郎 藤田	本元	哲			八郎 原	木	俊介	此美 誠一 永田宗一郎	平七 田		八永金太郎	湖	平	邱	部	田	保政水野一	清定	茂樹 大和	副部長香川先生	山剛熊	井 勇 仙	

委員部

委問

雜

委員部

委員部

委員 藤田小太郎 中津 桂三 中村 四郎 村木 忠治・ 益田 乘清 阿武 義輔 村木 忠治・ 益田 乘清 阿武 義輔 阿武 縣 保長河野先生 副保長近藤先生 三井先生	
金面 五 拾八 圆 七 拾 经 也 金面 五 拾 八 圆 七 拾 经 也 金面 五 拾 六 圆 也 金面 五 拾 经 也 金面 五 拾 经 也 金面 百 五 拾 经 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 金 金 香 百 回 也 也 金 金 香 百 回 也 也 金 金 百 五 拾 经 也 金 金 百 五 拾 经 回 四 函 元 拾 经 也 金 金 百 五 拾 经 回 四 元 拾 经 也 金 金 百 五 拾 经 回 四 元 拾 经 也 金 金 百 五 拾 经 回 四 元 拾 经 也 金 金 百 五 拾 经 回 页 五 拾 经 回 页 五 拾 经 回 页 五 拾 经 回 页 大 拾 经 也 金 金 万 千 八 百 七 拾 六 圆 九 拾 四 圆 也 全 元 千 式 百 五 拾 经 回 页 九 拾 六 级 也 全 元 千 式 百 五 拾 经 回 页 九 升 到 页 五 拾 经 回 页 五 拾 四 圆 也 全 元 千 式 百 五 拾 四 圆 也 全 元 千 式 百 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 元 五 五 拾 四 圆 也 全 元 千 五 五 拾 四 圆 也 全 金 元 千 五 五 拾 五 圆 元 拾 五 图 五 五 拾 五 图 五 五 拾 五 图 五 五 五 五 五 五 五	
上型經 総經証前 總 型基維褒運盡書辯雜游野庭柔劍 年度 支 面 預金	
級部 著利越 越 高積子金 高 越積費 部 部 部 部 部 部 部 部	



同

窓

() 全大正十四年 十 月

口新入會員歡迎會

三月三日、母校第二十五回卒業生の入倉歡迎會を、卒業式終了後母を書れ、主人側さして田坂信一、長井寬治、石原忠亮、田淵武彦、市間恒郷、香川景久、伊藤通利、堀幸一、河野通穀、板垣克、中吉岡恒郷、香川景久、伊藤通利、堀幸一、河野通穀、板垣克、中港江廷彥諸氏出席さる。新入會員八十四名缺席者二名のみ。 河野雄東の開會の辭に次いで岩田會長、駒田、伊藤二古川、相島の諸先生臨韓事の開會の辭に次いで岩田會長、駒田、伊藤二古川、相島の諸先生臨韓事の開會の辭に次いで岩田會長の告訴あり、最後に 萬歳三唱裏に閉會せり。

口獎學賞授與

松浦爺三郎 岸 香館

永見 真人

华 照兵 禮 敬 美 五 彦 一 作 夫 紀 郎 岩田 忠夫 野稻 水野 即即 三好 識介 池上 仙波 武夫 武 五鳥 直人 峰岡 夏文 大永金太郎

口特別會員藤井一郎先生退職

口評議 員會

四月四日、布後八時より風月樓上に於て、に就いて協議せり。 岩田校長山口轉任問題

□第十回定期大會

下田石敷屋垣で 來熊忠孫重開 堀 前 末 行 見 阪 岡 本 玉

特野 純亮 和田 港 藤井幸大郎 田阪 信一松浦 茂 竹下 五郎 河野 通穀 羽倉 市熊 中津江延彦 中津江延彦 「東韓事を座長さら評議員半數改選の結果 南屋、厚東、河野、山本、中津江五氏重任に決す。 大會方法變更に就いて、相當議論起りしが幹事に於 て熟考の事まし、配膳に移る。かく深更歡談裏に閉會す。

口三隅支部大會

の如し。 出席

佐伯	桑原	朝枝	吉見
義治	仁作	接英	平助
	後藤	辻野	和
	乐一	有一	道質
	杉山	坂田	Ill
	守輔	義亮	香源
	柏村	桑原	中原
	Œ	松一	豫一

りき。 より本部の現況及將來の希望を語る所ありて 頗る盛會

口上級學校在學者調

す。參考の爲めに掲載します。御回答になつた 方には厚く感謝しの會員に照會しましたか、 其の中回答のあつたものは左の通りで母校卒業生にして、目下上級學校に在學する者に就て、 四十餘校

	-		ex				TE						左				75		果	4			
R	可问	文、甲、一年	同	同	理、乙、二年		理、乙、三年	一甲、三	△山口高等學校	理,甲,一年	甲、三	△松江高等學校	理科二年 横	△甲南高等學校	横須賀海軍砲	同四學期	機關科三學期	機關科二學期	航海科二學期	△東京高等商船	豫科一年 廣	躁科二年 池	The state of the state of
老訓	田中		理理	來島	長嶺	岡田	有田	田村		堀永	板垣		山秀		術學校	生石	生坂	生	生	學校	田	田	-
祖衆三国				俊	Œ	友		13		小忠奏	211		雄		校練智	九丸	21	维井	小方		雄	織三	
K	了誠	黎	質	雄	博	市	E	豐		郎	雅				生	孝一	博	為貞	數馬				
Tre	- 17	200				-00							问		守田		同	同				同	
24,	同	同		同	同	理、田	文、	理、		交、	理、		年		吉		吉	III					
	*					甲、	甲、	甲、		甲、	2		久		光		屋	縣				346	
						一年	年	三年		一年	三年		保田		同(實		遊	膨				進藤	
永見	大島	山村		鈴木	佐伯	吉田	谷井	侧野		中塚	中村		馥		質智生)			同				研治	
真人	政輔	清		研介	正七	顧	カ	学夫		俊二	俊雄				堀			菜屋					
														3	粒			昇					

△神月京	水科、	△名古日	阿	一年河	同	二年	三年	○日日	[10]	同	同	豫科	同	同	大學	△法政	交、甲、	△浦和	同	理、	理、甲、一年 河邊芳士	文、
月高等工業學	945	度高等商	宮原	河内	田中	來島	上田	尚等商業學	二部			發科、一部	同	經濟	部、法女	大山	甲、三年	高等學校		乙、一切	中、一	乙、一切
學校	大谷	業學校	恭	政一	商一	縣男	告	水學校	邹	如	4:	却		四學部	學部	rås	十 鈴木	ex	上田	中山木	十河海	中 流口
	正信		同	一年	同	二年	同		三輪	長屋	村田	惠本	年	年	二年		小博		76	十 浩	邊芳太郎	三
			中野	田中	津田	百濟	安藤		武	俗	清男	義正	松本喜		村崎		14		75	***	~	24
			芳	勝太郎	離	茂	次			同	同	间	八	芳朗	四郎		同			同	同	
			同	阿	问	同	阿				11:						二年					
			吉田	阿部	石田	濱野	上田			竹	年 末岡	河					田原			和田	高尾	
				悦 情		=	信			六	遊	內健太郎					節夫			五郎	延彦	
	_ !	<u></u>			-		<u></u>			4		<u></u>				Δ		Δ				^

理、一、四年 濟藤 理、一、四年 濟藤 理、一、四年 濟藤 科二年 中、四年 濟藤 科二年 中、一、四年 濟藤 科 △廣島高等工業學校 機械工學科、二年 應用化學科、二年 機械工學科、二年 機械工學科、二年 谷川 横田司馬车 議夫 小野 松鳥遊原本居谷 好長武 道治 武 吉 恭 恭 恭 理、三、 岩田 同同 豫 同 一年 松尾松千代 二年(同 阿武 二年 元間 副 永宮信常 多田 黎 義信 幾男

計報 一東

窓を表す。 窓を表す。 窓を表す。

施及ます。 村井勝君(第十回卒業)十一月十五日病死 同村直一君(第二十三回)卒業二月十九日病死 周村直一君(第二十三回)卒業二月十九日病死 第屋幹事母堂三月二十一日逝去 金子勘助君(第九回卒業)二月二十二日病死 三輪一輔君(第十四回卒業)二月二十二日病死 三輪一輔君(第十四回卒業)四月二十二日病死 三輪一輔君(第十六回卒業)四月二十七日病死 超原梓君(第二十一國卒業)股父逝去 松原梓君(第二十一國卒業)股父逝去 松原梓君(第二十一國卒業)股父逝去

大正十四年十二月二十日發 行大正十四年十二月十五日印刷納本

翻杆者 二 輪

勗

印刷者 荒 瀬 徳 治

印刷所 信清舍印刷所

